
キズナ！

やっこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キズナ！

【Zコード】

Z8837E

【作者名】

やつこ

【あらすじ】

借錢取りに追われる日々を過ごす貧乏少年、秋坂才悟あきさかかずが、超大金持ちの家の養子に！？それまでとかけ離れた生活と個性豊か過ぎる面々に囮まれて戸惑いつつも、学園生活を中心につまざまな人とのキズナを深めていく才悟の学園ラブコメディー・ドジで天然なメイドやツンデレな義妹とかも登場するよ！

第1話・世界の中心で理不分明を嘆く（前書き）

この物語は、作者が完全なる暇つぶしで書いた文章で成り立つ不定期更新のラブコメです。過度な期待はしないでください。あと、小説を見るときは画面から30cmは離れて見やがってください。

第1話・世界の中心で理不分明を嘆く

俺は住宅街を疾走していた。

今100m走の記録をとればすばらしい結果が出せると思つ。その代わり、止まつた瞬間に過剰な激務でぶつ倒れると思つたがな！

さて、なんで俺がそこまで必死に走つているのかと云つことだが、

『逃げないでくださいよー！ 取つて食べよつてわけじゃないですかーー！』

可愛らしい少女の声に遅れて、ガトリングガンによつて放たれた銃弾が俺に殺到する。

「ふざけるおバカッ！！ そんなふつやうなもんぶつ放しながら言つても説得力の欠片もねえよつー！」

『しょ、しょうがないじゃないですかー！ しのへりに足止めに使えそうな武装はこれしかついてないんですからー！ 大丈夫、威嚇射撃ですから絶対に当たませんよー！』

「信用できるかボケヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒー！」

つまりは、いつこうことです。

じうこつわけか、ただいま俺はメイドさんの乗るくりこぶたーに追われている最中です。

嗚呼、どこへ行ってしまったところのか我が平穏！

とつあえず、俺はどうしてこんなことになつたのかを再確認するためにほんの少し前の出来事を思い出すことにした……。

唐突ですがみなさん。

家まで帰つてきたら、黒いスース着たおっさん達がたむろしていました。

「は？」

俺の思考は一瞬でフリーズ。ちょうど隣に電柱があつたので、そいつに頭をぶつけてみた。痛かった。気絶するかと思つた。ついで

にこうと、通りがかりの親子の視線が痛かった。こり、指を指すんじゃねえよ坊主。

とりあえず、ぐるりと反転してすつたかすつたか。曲がり角を曲がると、一呼吸置いた。

……え？ あれ何？ 何かのドッキリ？

徐々に解凍されてきた思考がパーシクに陥りかける。待て、とりあえず落ち着け俺。状況整理してみよう。

今、俺はいつも通り まあ、明日から春休みだから多少浮かれているが 放課後を迎えて家へ帰るところだ。うん、それはいい。で、ちょうど家から50㍍ぐらい離れた曲がり角をさつき曲がったんだ。そしたら俺の家を囲むように黒スースが徘徊していた。

はい、まつたく理解できません。

「つまおおおおおおなんだこの状況おおおおおおおおおつー。」

マジで意味分からん。何故に俺ん家に黒スース集団？ もしや借金取り？ ついに痺れを切らした奴らが家を差し押さえに来たのか！？ だから金借りるのもほどほどにしつけつて言つたじゅねえかクソ親父！！

……いやね？ 実を言つとこういう状況には慣れてるんです。俺ん家すげえ貧乏だから。親の負債を俺がバイトして返してるぐらいだから。だからヤクザさんの取立てなんて家じや日常茶飯事なんです。

でもあの連中はじつやうらういつ堅気で『ない』商売をしている人達とは違う気がする。なんていうか、着てるスーツも高そうだし、むやみやたらと威圧してる風でもないし、なによりわざわざ借金の取立てであれだけの人数は動員しないだろ？。

だが、彼らとヤクザとは一つだけ共通している部分がある。幾度となく死線（借金の取立てから逃げること）を経験している俺には分かる。連中の懐に拳銃チヤカが収められていることが。

「つーか、あいつらなんで俺ん家困んでんの？」

おかしい。金を借りることはあれど、人様に迷惑をかけるようなことをした覚えはないのだが。……はつ！　まさかっ、これがテレビでも騒がれている『テロ』という奴なのか！？　とこいつとは、標的はあの家の主である俺！？

俺、顔面蒼白。

と、とにかく！　このままじつとしているのはすげえ危険つぽい！　何か、何かアクション起こさなければ！

しかし、俺は一体どうすれば

- 1・たたかう
- 2・まぼう
- 3・わざ

4・ひとつ

ちょっと待て！？ なんで戦つ選択肢しかないの！？ つか最後の選択肢は暗に俺に死ねと！？

……ふう、不条理な選択にツッコム」とで冷静さを取り戻したぜ。さすが俺、もつともハリセンが似合う男と評されただけのことはあるぜ。ぜんぜん嬉しくないけどな！

さて、冷静さも取り戻したことだし、今度はまともな選択肢が出てくれることだらう。よし、一体俺は何をしよう！？

1・警察に連絡

2・とんずり

3・小宇宙を燃やす

4・あたたたたたたたたたたたたたたつ！

うん、まともな選択肢は最初の2択だけだな。ちなみに、『小宇宙』は俺の脳内で速攻力タタカナに変換された。言わずともみんな分かるよね？

まあ、とにかくここは無難に”1”だらつ。さつやく俺は携帯を取り出す。

……しまつた。そういえば今日は携帯を持っていくのを忘れてた。つまり、携帯はあの無敵の包囲陣の向こうだ。近くに公衆電話もないし、コールは無理っぽい。

なら、ここで選ぶのはもうひとつしかないだらう。

「む、貴様は！」

接近した俺に黒スーツ達が気づいた。一瞬でチャカラを引き抜く。スゲエ恐い。ヤクザを見慣れた俺でもちびりそつだつた。

俺はその恐怖を押さえ込むために一度深呼吸すると、地の底から響くような唸り声を上げながら両腕で軌跡を描いていく。

「な、これは！？」

「あのガキの周りに小宇宙が見えるつ

「しかもあの軌跡は……！」

ようやく気づいたか。だが遅い！

「ペガス流星拳！」

音速の拳が黒スーツを捉える！

「どうだ……！？」

「ふつ……」

なつ……まさか、俺の必殺技が効かないだと……！？

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ア……！」

いつせいに向けられた拳銃が俺の体に向けられ発砲される！

次の瞬間には俺の意識は完全に途切れていった……。

DEAD END

「はつ」

いかん、おもしろそうな選択肢だつたからつい妄想してたり殺されてしまった。我ながらリアリティのある妄想だつたぜ……。

さてと。気を取り直して、もちろん選ぶ選択肢は

……

……

……

てへ

「あたたたたたたたたたたつ！」

3秒間に50発の拳が正確に敵の秘孔を突く！

「お前は既に、死んでいる！」

パンツ

俺は既に殺されていた……。

DEAD END

「うおっ、あまりのリアルさにマジで小便ちびりかけたぞ」

想像力がたくましきざるものも問題だな。さて、気を取り直して今度こそ

1・控えたまえ、君はラ ュタ王の前にいるのだよ

2・はりやほれうまいー

3・絶望したッ！ 何回やつてもDEAD ENDになるijklと
絶望したッ！

「もうええつちゅうねん」

自分の頭に関西弁でツツコム。俺の頭に潜む陽気な魔は舌を出
して「てへっ」と笑つた後消え去つた。きもい。

「くそ、あまりの非現実ぶりに頭がショートしてやがる」

本当に今度こそ、俺は頭を切り替える。大丈夫、奴らはまだ俺に

気づいていない。ここは角だから奴らからは死角だし、こいつそり反転すれば問題ない。ふふふ、俺の（借金取りによつて）鍛え上げられた俊足に付いてこれるかな？

……それにしても、さつきからなんかうるさいな。この音からするとへりだらうか。低空飛行しているのか、思いのほか近くから聞こえてくる。

ていうか、真上にいた。

「うおーー！」

プロペラが巻き起こす強風に見舞われて俺は思わずのけぞる。ちよ、ここ市街地だぞ！？ こんなとこでそんな超低空飛行が許されていいいのかー！？

「あーー！」

のけぞった拍子にポケットに入っていたものが飛び出した。500円玉だ。ついでに言つと、これが今週いっぱいの食事代である。

ちやほん

風に吹かれた硬貨は下水へと落ちて流されていった……。

ぶちんっ！

たつた今、俺の最後のリミッターが外された。

「おんぢりやあああああああああああああつー！ ええええええええええええええつー！」 僕の飯代返しやがれ

俺は身近にあるものを問答無用で投げつける。手始めに石。命中。

カン

そいつは鼻で笑うがのじとく石を弾きやがつた。

何かに取り付かれたかのように俺は手当たり次第に物を投げつける。うふ、うふふ、うふふふふふふふ！

「あつ」

と、俺は自らがぶん投げた物体を視界に入れて血走った目が正常に戻った。

あれは、俺の財布だ。俺の全財産だ。俺の命だ。

それは今までにない綺麗な曲線を描くと、狙い済ましたかのよう
に高速回転するプロペラへとダイブした。

ブオオオオオオオオオオオオン！

斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬！

る自爆だった。終わった。何もかも。つーか、どうからどう見ても完全な

『あうーつ。物を投げないでくださいよつ。これは借り物なんです
から、傷なんてつけちゃつたら怒られちゃいますー！』

と、この世の終わりみたいな顔で地面に膝をつく俺の耳に、拡声器越しの女の子の声が届いた。俺は生氣の欠けた瞳で、へりから飛んできたらしい声の跡を辿つて視線を向けた。

「つてメイドかよー?」

渾身のツツゴウによって生きる力を取り戻した俺。俺の言葉通り、拡声器を持つてこつちに声を届けた主は誰がどう見ても分かるメイド服を着用した女の子だった。

俺、しばらく呆然。あまりにもシシ「ミ」所があすきて一度にすべてをシシ「ミ」切れない。

『えーと。あの、はじめまして。あなたが秋坂才悟様ですよね?』

とりあえず俺は頷く。

『はあ、よかつたあ。もし無関係の人だつたりしたら、一生ぶんの恥をかくところでした。えつとですね、いろいろと言いたいことはあると思うんですけど、とりあえず身柄を確保させてくださいね』

「は？」

呆けた声を出す。身柄の確保つて、何を言つとるんだこい、つ
は……。

気づいたら、黒スーツの男達に囲まれてました。

くつ！ 最初にどこをツツコムか悩んでいたから気配に気づけなかつた！

『『心配なくー。暴れさえしなければその人達は決して危害を加えたりしませんから』』

「じょ、冗談じやねえ！ こんな不得体の知れない連中に捕まつてたまるかよつ！」

俺は懐に隠し持つていた爆竹を地面上にぶちまけて連中がひるんでいる隙に逃走した。爆竹はいざというとき（つまりは極道の人々に絡まれたとき）逃げ延びられるようにいつも持つていて。少ないお金を削つてまで買つておいてよかつたぜ。

『あつ！ ま、待つてくださいよーつ！』

慌てて追いかけてくるメイドを乗せたヘリと、黒スーツ集団。… ここは本当に日本か？

「ちくしょーつ！ なんだつて俺がこんな目にーつ！」

で、今もなお俺は追われ続けている。

今の状況が有り得ないぐらい理不尽であることが再確認できただけだったな、今の回想。

「納得できねーっ！」

俺は魂の絶叫を響かせながら街を走る。ここは俺が生まれ育った街だ。強面のおっちゃん達との鬼ごっここの場も大半がここなので、俺はあらゆる逃走ルートを熟知している。だがいかんせん、相手は空からも追いかけてくるのでなかなか追跡を振り切れない。かれこれ三十分ぐらいは走り続けたんじゃないかな?

「ぜえ……ぜえ……も、ダメ……」

俺の体力タンクはとっくに空っぽだった。今は気合で足を動かしているに過ぎない。ただでさえ最近ろくなもん食つてないのに、こんな限界ギリギリの運動してたらマジでぶつ倒れるわ。

え？ 助けを呼べばいいじゃないかって？

呼びましたよ。ええ、近くの交番にそつこーで駆け込みましたよ。

おまわりさん、威嚇射撃にビビッて退散しましたよ。俺を置いて。今日ほど日本警察が頼りないとthoughtことはなかつたですよ。

しかも本部からの増援が来るわけでもないっぽい。パトカーのサイン聞こえないし。すれ違う人は助けを求める視線を送ると田をそらすし。あげくの果てに安全圏から写メ取られてるし。よい子のみんなはそんな真似しないよにね！ こんな状況一生かかっても遭遇しないと思つけどな！

「ダ、ダメ……マジダメ……ちょっと、休憩……」

俺は建物の影に身を潜めた。ここなら空からでも死角になつて場所は分からぬだらう。逃げ延びたわけじゃないけど、ここならしばらくは安全だ。ここで体力回復に努めよう。

『あ、あれ？ 才悟様？ 秋坂才悟様ー？ どこに行つちやつたんですかー！？』

案の定、あのメイドは俺を見失つたらしく狼狽した声で『どうしちゃうぢつじよつ……！』と連呼している。ちょっと可哀想な気もするが、こつちもかなり必死なので冷徹にならせてもらひ。

『あうー。こ、困りました……。もしこのまま才悟様を連れて行けなかつたら田那様になんとお詫びしていいやら……。え？ なんですかヤマさん？ 田那様から渡された資料を見ていい事を思ついた？ これならなんとかなるかも知れない？ ほ、ホントですかヤマさん！ ど、どうするんですかっ！？』

ねそらへ、あのへりを操縦しているのであるツヤマセヒロのひせきの
助言に耳を貸すメイドさん。ていうか、作戦会議するなら拡声器切
れよ。

『……えっと、そんな馬鹿みたいに単純な方法で大丈夫なんでしょう
か？「うう、でも他にいい案もないし……ええいままよー。』

作戦会議は終わつたらしい。ふつ、一体何を思いついたのかは知
らんが、完全に気配も殺した俺を見つけるなど不可能なのだよ。俺
を見つけたきや 热源探知機でも持つてくるんだな！

チャリン

ピクッ

「ハ、この音は……！」

聞こえた。微かだが確かに聞こえた。この俺が、あの音を見逃す
はずがない。

チャリンチャリン

ピクピクッ

きりん、と俺の目が光る。

「そこが一つ！」

俺は影から飛び出すと、さつきまで疲労困憊だつたとは思えない速度で通りに出た。

そこには、俺が求めて止まないお金が落ちていた。

「アイ・ラブ・マネー」
「...」

俺は獣の「ごとく硬貨に飛びついた！」

ガシヤン

は？

気づいたら、俺は檻の中に閉じ込められていた。

頭上には、果然と俺を見るメイドとヘリ。

『……まさかホントに引っかかるとは思わなかつたです』

「」の瞬間、俺のオツムレベルはそこら辺の野鳥と並ぶこととなつた……。

結論から言つと、俺は檻に入れられたままへりに吊るされて御用となつた。

街中のみんなから笑われましたよ、ええ。

……ぐすん。べ、べつに悲しくなんかないんだからねつ。

連れて来られたのはどう足搔いても一生縁のないはずだった超豪邸だった。そう、『超』だ。こんなでかい屋敷、漫画の中でしか見たことねえよ……。

俺はその屋敷のこれまで広い庭に下ろされると、思いのほか丁重

に屋敷へと招きいれられた。中も当然のことく豪華で、あまりの輝かしさに気絶しそうなのを堪えながら連れられていく。

んで、連れて来られた一室で俺はダンディなおじ様と対峙するハメとなつた。

「やあ、はじめましてだね、秋坂才悟くん」

「はあ、どもです」

俺は心底緊張しきつた調子でなんとか言葉を返す。「こんなに高そうなものばかり置いてある部屋なんかに連れてこられたら俺みたいな貧乏人は萎縮するしかない。うう、胃が痛い……。

「ははは、やはり緊張しているかな」

「は、はあ……」

「と、まずは自己紹介しようか。私は朝霧厳重朗あさぎりつねだいとうら。それなりに有名だと思うのだが、聞いたことはないかな」

「あ、朝霧厳重朗……！？」

ちょっと待て！ 朝霧厳重朗って言えば、世界でも有数の経済力を誇るっていう朝霧グループの現社長じゃないか！ 通りでどつから見た顔だと思った……。

田の前の人たのまへのひとがそんな超ビッグな人であることが分かつてますます小さくなる俺。

「そ、そんな人が、なんで俺なんかをさらうて……」

「さらうつ……ああ、すまない。べつに君をさらうしようとして使いを送ったわけじゃないんだ。彼女はメイドとして優秀なんだが、時々暴走気味になってしまつのが欠点でね。許してやってくれると助かる」「

ぶんぶんと俺は頷く。命がけで逃げていた俺としてはツツコミたいことこの上ないが、こんな大物相手にツツコミができるほど俺は肝が据わっていなかつた。

「まあ、その私が君に足を運ばせた件についてなんだがね。いきなりなんだが、才悟くん、今から私が言つことを真剣に聞いて欲しい」

「ゴクッ……は、はい……」

「実はだね」「

朝霧さんはそこで一息置くと、とても真面目な顔で、言った。

「……今日から君はここでの養子となつた。よろしく、マイサン」

「こきなり過ぎだバカ」

こうして、俺の波乱万丈な日常が始まった……。

第1話・世界の中心で理不尽を嘆く（後書き）

ああ、ついにやったやつたよ……無謀なる一作平行進行……。前もこれやつて挫折したのに……。

というわけで、前書きにも書いた通り、この小説は作者が気が向いたときに”だけ”書くという不安要素ばりばりのお話です。無期更新停止とかも有り得ます。まあそれなりにがんばりますが、みんなも暇つぶし目的でこれを見てください。

あと、これを見ておもしろいと思った方がいたら「ソウルマスターKAZUKI」の方も見ていただけたら大変うれしいです。感想お待ちしてまーす。

第2話・シントレの妹に憎まれて眠れないお話 前編（前書き）

なんか才悟のキャラがソウルマスターの主人公と少し被ってる気が
……ま、いつか（笑）

拝啓、オフクロ様。

そろそろ本格的に春の息吹を感じさせてきたこの時期、いかがお過ごしでしょうか。ワタクシは元気に過ごしています。あなた様やオヤジ様の残した借金で極道の人に脅されながらも、オホーツク海で力二採りをすることも臓器を売ることもなく生きてますよ、ええ。自分でも「キブリの如き生命力に驚いております。

そんなワタクシですが、実は今とても困ったことになっています。どれぐらい困っているかと言つと、あなた方が残した負債額の桁数に絶望し途方にくれた時ぐらいにです。……いやほんと。あの時は自殺でもしようかと思いました。マジで。

ところでオフクロ様、朝霧グループというのをご存知ですか？ええ、そうです。「金持ちだから勝ち組なんて嘘つばちだ」とちよくちょく負け惜しみをほざいていたあのオヤジ様が忌み嫌う、いわゆるお金持ちです。ワタクシは何故か、そのお家の養子として迎えられました。

あ、今殺氣放ちましたね？ ブルツと来ましたよ。声も聞こえます。「何あんた？ あたしら裏切つて自分だけ裕福に暮らそうつて？ ひ孫の代まで祟るぞ？」

……まあ、そう思いますよね。でもですねオフクロ様、それは間違いです。これ、ぜんつぜん羨むことなんかじゃないです。

むしろ誰か代われ。

その理由については……まあ、話が進めばいざれオフクロ様達にも分かる日が来るでしょう。

それでは、今日もワタクシ秋坂才悟は往きます。磨きぬかれた逃げ足と、刃の如く鋭いツツミミを武器にして。

……え？ なんかオチないの？

窓から差し込む光で目が覚めた。

「ん……む……もう朝か……」

俺はのそのそと体を起こす。あー、なんかすげえ平和な夢見たなー。牛乳配達して学校行つて勉強して夕方のバイトしてチャ力持つたおっちゃんに追つかれられて……つていつも日常じやん。自分の夢にツツコミを入れてあぐびを一つかまし、寝ぼけた頭で考える。えつと…もう春休みも一週間過ぎたんだよな…。今日も学校は休み…ああでも牛乳配達に行かなきや…今月も大赤字だし…。とりあえず朝飯作るか…。

そこまで考えて、自分がいる場所が俺の家でないことに気づいた。

「あ

そして思い知らされる、現在の俺の立場。

さらに、その立場を裏付ける、このだだつ広い部屋。

……うん、夢だ。今こうしてここにいることは夢なんだ。ははは、
そうに違いない。そう思わせる。え？ 一週間も経ったんだからい
い加減慣れろつて？ ならテメエ一回代わつて見やがれ。

「つてなわけで、お休み」

俺は考えることを放棄してもう一度寝る体制に入る。うお、スゲエふかふか。すやすや。

「おはようござります才悟さん。今朝もいいお天氣ですよー」

「ん、これは幻聴だ。こんなメイドさんの声、俺は聞いたこ

ともない。そもそも俺の家にメイドさんなんかいるわけない。そんなの雇う金なんてどこにもないからなー！

「あれ？ まだ寝てらっしゃるんですか？ ふふ、意外と寝ぼすけさんですね。ほらほら、起きてください。そろそろ朝食の時間です」

うん、この体を揺すられる感覚も夢だ。女の子に、しかもメイドさんに起こされるなんて、そんなシチュエーションが俺に訪れるわけがない。自分で言つて悲しいけどなー！

「あーー。なかなか起きませんね、びつぶつ。あ、麗菜様？」

なにい！？ 麗菜だとっ！？

「珍しいですね麗菜様、こんなに朝早く起床なさるなんて……ってなんですかそれ！？」

「真奈美！ そこ退いて！」

どりやあああああああー！ と乙女らしからぬ気合の籠つた声と共に放たれる殺氣！ 俺は脊髄反射でシーツを跳ね除けベッドから飛びのいた。

「ふーんー」とふざけた音。

……あの、俺にはさつきまで寝てたベッドがデカイハンマーで粉砕されているようにな見えるんですけど。ついでに言つとハンマーに『10t』とか書かれてるんですけど。

「テメエ俺を殺す気か！？」

当然のことながら講義する俺に対して、その細い腕のどこにそんな力があるのか不思議でならない少女・麗菜は、チッと舌打ちなんぞしゃがつた。こいつホントに「令嬢か？」

「何避けてるのよ秋坂才悟！ おとなしく私の肃清を受けなさいよ！」

「ふざけるおバカ！ そんなもん受けたらマジで死ぬわ！」

「当然。 だつて殺す気だもの」

やべえよこの女。 田中がマジだよマジ。

「私ね、前から思つてたの。 人の体つてどのくらいの衝撃まで耐えられるのかつて。 だつて、ちゃんと限度を知つていないと痛めすぎて壊しちゃうものね。 ふふ」

しかもドSですよこの人。

「うう、妹がこんな殺人鬼で攻め好きなんて、お兄ちゃん悲しいよ

「だ、だだだだだ、誰が妹ですつてええええええええええええええええつー？」

「ひいい！」

10tハンマーをぶんぶん振り回す麗菜から逃げ回る俺。 だつて10tだよー？ ベッド粉碎だよー？ なら逃げるしかないじゃな

いかつ！

「ナ！」までです」

と、突然颯爽と現れた影が俺に迫るハンマーを軽々と受け止めた。
「お嬢様……仮にもあなたは朝霧家の娘なのですから、もっと慎み
のある行動をしてください……」

「し、修司さん！」

「遅いよ修司さん！ でも助かったよ！ 凶暴化した麗菜を鎮圧で
きるのはあなたしかいない！」

「退いて修司！ 私は朝霧家時期当主としてそういうを殺さなきゃい
けないの！」

「お嬢様。いい加減になさらないと、旦那様に聞こつけますよ？」

「うう」

「氣勢をそがれる麗菜。じい、こんな性格だけどファザコンだか
らなあ。

いつもならそれで決着がつくのだが、今日の麗菜はまだ威勢を失
つていなかつた。

「やう言えば修司。三田ほど前から私の下着が一つ見つからないの
だけど」

「は？ そのようなことは伺っていませんが」

「その下着、あなたに盗まれたつてお父様に言つたよ」

「いつ、悪女だ！」

「なつ！ そ、そんな世迷言が通じるわけが

ない、とは言い切れない修司さんだった。その人も麗菜には甘いからな。

「ふふ、そうなつたら、あなた明日から路頭に迷う羽田になるわね。ううん、もしかしたら社会的にも生物的にも抹殺されるかも……」

「まあい！ このままでは修司さんが屈してしまつー。なんとか修司さんを援護しないとー！」

1・正面から突っ込む

2・不思議な踊りをする（速攻で吹つ飛ばされる可能性あり）

3・弱点を突く

もうらん『3』に決まつてゐつ！

「おー、麗菜！」

「九月」

ツツツツツツ

あ、やばい。

直後、手加減抜きで振りぬかれたハンマーが俺の体を吹っ飛ばした。

「才悟さん…… わかがに今のは才悟さんが悪いかと……」

うう。ちくしょー。なんで俺がこんな目にあわないと云へないんだーっ。

俺はやめないと泣きながら、ほんの一週間前のことを語り出していく……。

「才悟くん。君にはこの朝霧家の養子となつてもらいたい」

厳重朗さんの言ひことを要約すればこうだ。

厳重朗さんと俺の両親は実は学生時代からの親友らしい。そう言えば昔親父がテレビに出でていた厳重朗さんを指差して「こいつ俺の親友なんだよ」とかほざいてた。てつくり「冗談かと思つてたんだけどな。

学園を卒業してからもその関係は続いていたらしく、たまに会つたりしていたそうだ。で、その折に親父が「もし俺達に何かあつた場合、息子を頼む」ともらしていたそうだ。まあ、ヤクザに追い立てられる日々だつたからな。一応保険として頼んだんだろうな。で、今回その保険が働いちまつたわけだ。

「一人のことは私の耳にも届いている。交通事故、だつたかな？」

俺の両親は先日車の運転中、大型トラックに衝突して亡くなつた。祖父母は既に他界しており、親戚もいないため、俺は一夜にして天涯孤独の身となつた。で、そんな俺のために厳重朗さんは俺をこの家の養子にして住まわせてあげようと言つていてる訳だ。

「その話、断つてもいいですか？」

俺はきつぱりと言つた。

「親父達の気遣いは嬉しいし、厳重朗さんが心配してくれてるのも分かつてゐんですけど、俺なら一人でも大丈夫です。親父達はしょ

つちゅう家を空けてたから死ぬ前も半分一人暮らしだったし、今はバイトも出来る年齢なんで生活費を稼ぐぐらいならなんとかやっていきます

まあ、誰かの施しを受けるのが気に入らないってのもあるけどな。

「ほつ……では、借金はどうするのかね？」

「ぐつ」

それを言われると俺もきつい。今のところ返済の日処はまったく立っていない。毎日の生活費だって危ういというのに返済する余裕なんてあろうはずがない。今住んでる家を売ったぐらいで返せる額でもないし。

「こ」の家の養子になると言つなら、その負債もじかりで負担するよ

な、なんという懐の大きさ。いつも人にタカッてる俺とは大違いだ・・・。

「で、でも、いくら親父達の親友だからって、結局は他人なんだから、そこまで迷惑をかけるのは・・・」

「そんな悲しいことを言わないでくれたまえ。あの一人の息子といふなら私の甥も同然だ。私にはおてんばな娘が一人でね。妻にも先立たれてしまつて寂しいと思つていたんだよ。それに常々息子が欲しかつたんだ。君のような子が息子に来てくれるならこれほど嬉しいことはない」

「うーん、でも・・・」

「じゃあこうじよう」

なおも渋る俺に業を煮やしたのか、厳重朗さんはあらかじめ考えてあつたかのように提案した。

「君はたぶん今こう考えている。私が両親の知り合いとこいつのは本当だらうが、だからと言つて私を完全に信用することは出来ない。それにいきなり自分を連れ去つた男の施しを受けるのはプライドが許さない。なにより、孤高が好きな自分の私生活を私に乱されるのが気に入らない。違うかね？」

「……最後以外はおおむねその通りです」

嘘だ。厳重朗さんの言つたとおり、俺は一人でいることを好む。一人でなんでもこなせるということを証明したいからだ。だが、何故この人はそれを知つている？

「なるほど君が養子を否定する理由は分かつた。しかし、完璧に否定的というわけではないだらう？ 今までは負債を返すどころか生活していくのも困難だからだ。それなら話は早い。君が私から負債額分の金を借りて私に返せばいい

「……つまり、俺が養子になつてあなたの後を継ぎ、次期社長として、自分の力で借金を返済すればいいと言いたいんですね」

「おや、話が早いね」

なるほどね。ようやく話の全貌が読めてきた。

「どうだろう？ 悪い話ではないと思うがね。確かに私は信用がないかもしれないが、君も知つての通り私はそれなりの地位にいるものだ。下手なことをしようものなら失脚するのは目に見えているのだから、君をどうしようなどといつ氣はないよ。君はただ私を利用すればいいんだ。最初はそれでいい。愛情なんて後からいくらでもついて来るさ」

「そりは言いますけどねえ。俺は今まで貧乏だつたことを除けばふつつーに生きてきたガキですよ？ そんな俺がそう簡単に会社経営なんて出来るとは思えませんけど」

「もちろん、それに準じた学生生活も用意するつもりだ」

「ふう……」

思わず溜息が出た。どうやらこの人は何がなんでも俺を息子にしたいらしい。

「分かった、分かりましたよ……。俺の負けです。息子にでもなんでもしちゃつてください」

厳重朗さんは渋みのある笑顔で頷いた。

「そう言つてくれると思つていたよ。戸籍の手続きなどの細かいことはこれからで済ませておこう。今日から君はこの家の長男、朝霧才悟だ」

新しく手に入れた名前は、とにかくむづかゆかった。

ちょうどいい時間というところで、俺は嚴重朗さんに連れられて食卓の席に着くことになった。

……つーか、なにこれ？

「ん？ どうしたね才語くん。お気に召さなかつたかな？」

「いや、もうじやなくて、これ、ホントに俺達が食うんですか？」

俺の目の前に並べられているのは、クソ長いテーブル一面を覆うほどの豪華な料理だった。まあ、うまそうだ。正直よだれが出るのを必死に我慢してるさ。でもさ、何よこの量？ これって一人分の人体に入る内容量超えてね？ 値段も量も、俺が普段取る食事の何倍にも匹敵するだろ？……。

「そうだね、私と君と、あと私の娘で食べるんだよ」

援護が増えたがそれでもどう考へても物理オーバーだ。こんだけあれば軽くパーティ開けるっての。

「嚴重朗さん。一つ聞きますが、これって一体何人前の料理なんで

すか？」

「うーん、大体20人分ぐらいか」

「舐めてんのかアンタ」

そもそも当然のようにしれつと言いやがったよこの人。金持ちの考えることは分からん……。

「あの、どう考えてもかなりの量が余るんじゃないかと」

「そうかね？ 君も成長期なんだから、これぐらいはペルつと行つちゃうんじやないかい？」

「んな某大食いギャルのような真似はしません。つーかできるか」

「ははは、分かっているよ。冗談冗談」

ケンカ売つてんじやないだろつなこのおっさん。

「なに、気にすることはないよ。余りは使用人達の夕食になるからね。私達は好むものを好きな分だけ食べて満足すればいいんだよ」

なんというリッチ。なにもしなくても飯が用意されているだけで感動していく俺がいかに庶民かを実感させられる。……あ、俺庶民じゃなくて貧乏人だつたわ。ははは……。
べ、べつに傷ついてなんかないんだからねつ。

「それにしても遅いなマイドーターは。そろそろ姿を見せてもいい
ころだが。おつと、噂をすれば……」

自爆して「の「の字を書いていると、厳重朗さんは扉に視線を向けた。俺もなんとなくそつちに田を向ける。

それはもう、すんじゃ美少女が立つてた。

「遅れてすみませんお父様！ 勉強に集中してしまつていて……」

「はつはつは。なに気にするな。それよりもこんな時間まで勉強しているなんて、偉いぞ麗菜。よし、頭を撫でてやろう

「ひさひー。」

「うわあ。あの年で親父に頭撫でられて喜ぶ娘つているんだな……。

……。

などとぶしつけな視線を送つてはいるが、それに気づいたのか、初めてその少女は俺に視線を向けた。真っ直ぐな瞳に、ちよつぱり高鳴るマイハート。ふ、惚れるなよ……。

「お父様。なにこの害虫？」

「え？ 書虫って俺ですか？」

「ひじひひ。害虫はないだろひつ麗菜。彼に失礼だぞ」

「うん、そうね。さすがに害虫は失礼よね。……で、何なんですかこの豚は？」

彼女にとつて豚>害虫なのだろうか。俺にはバカにしてはいるとい

「ついで豚＝害虫なのだけれど。

「おいおいそこのお嬢さん。俺のようなイケメンを捕まえておいてそれはないだろ？ ベイベー！」

「なにこの変態？ あも……」

「麗菜。彼は秋坂才悟くんと書いてね、今日からこの家の長男として生活することになったんだよ」

「へーそつなんですかあ。…………つてはあつー？ 長男つー？ この家に住むつー？」

「どもつす」

挫けず笑顔を返す俺。かなりの爽やかフェイスだから好印象は間違いないはず。

「以前にも言っておいただろ？ 近々新しい家族が増えるかもしれない。えーと、才悟くんは今年で17だから、麗菜の一つ上のお兄さんになるのか。二人とも、仲良くなるんだよ」

「ちょっと待つてよお父様！？ お兄さん？ この猿人類があー！？ お父様、それすぐ笑えないですー！」

さすがのこれには厳重封印されていた俺のリミッターが外れた。

「ちよっと待てこりうテメエ！ 黙つて聞いてりや好き勝手せざりやせがつて！ 僕だつてテメエみたいなつるべたが妹でがつかりだよちくしょううつー！」

「つぬ……つー？ そ、そこになおりなさい秋坂才悟！ そのブサイクな面をせらりと醜くしてあげるわー！」

「誰がブサメンだ！「ラアー！ そつこりうテメエは口リ娘だらうが！ そつは離れてると思つたぞー！」

「なんですか！」ええええええええええええーー？」

「やんのか！」ラアアアアアアアアアアアアアーー？」

魂の激闘が終わるまでしばらくお待ちください

「まつはまつは。もつ仲良しさんになつたんだね。お父さん嬉しいよ」

『『ビ』がだ（よ）つー』

結局、叫びすぎて喉痛いし腹も減ってきたところとて、第一次兄妹戦争は引き分けで幕を閉じたのだった……。

「なあつるべた」

「あにょづサメン」

「「Jのくんて」な料理どやつて食つんだ？」

「なに？ それが人にモノを頼む態度？ ふん、これだから品のない庶民は嫌いなのよ」

「……調子に乗りやがつてる麗菜さん。これは一体どのよつにして食べたらいいのか教えやがつてくださいませ」

「鼻で食べればいいのよ」

「なんとも品が「Jやつこませ」と」

『……………ピキッ』

「Jのまま」一次大戦が勃発してもおかしくないぴりぴりした空氣。周りで控えている使用人らしき人達ははらはらびくびくしていらっしゃる。そんな中で厳重朗さんだけが一人穏やかに笑っていた。や

つぱりこの人は大物だ。

「……ふん」

睨み合いで先に折れたのは俺の方だった。べつに麗菜の視線に気圧されたわけじゃない。理由はどうあれ、俺は麗菜の『お兄ちゃん』になつたのだ。兄貴として多少我慢せねばならないこともあるし、年上の俺がいつまでも子供のように意地を張るわけにはいかないからな。

つーわけで俺は興味を麗菜から田の前の料理に移し、無我夢中に食い漁つた。ええ、食いましたとも。麗菜がドン引きするくらいに（厳重朗さんは「若いつですばらしいね」とコメントするだけだった）。

くうーうめえー。よく考えたら最近金欠で昼以外はソルトウォーターしか飲んでなかつたからな。今の俺なら大食い選手権でいいとこ行けるかもしれん。

「あ、やべ」

がつついで食つた拍子に料理が俺のズボンにかかつた。幸い熱を持つてる食べ物じゃなかつたけど、うへえ、気持ちわりい……。

「失礼します」

どうしようかと思つてみると、静かに俺の元に来た一人のメイドさんがナップキンでズボンの染みをふき取つてくれた。さすがに全部は無理だつたが、なにもしないよりはずつとマシだった。

「あ、」つやべりも……ってああっ……」

「口ッ、ヒ田の前で微笑むメイドに俺は見覚えがあつた。忘れるはずがない。なんたつてさっさきまで散々追つかけ回されてたのだから」

「お、おお、おおっ……」

「ああやつだ、紹介するよ才悟くん。その子は雨宮真奈美あまみやまなみくん。これから君の身の回りの話をしてくれる人だ」

「初めまして。今日から才悟様のお世話をさせていただく専属メイドの雨宮真奈美です。よろしくお願ひします（口ッ）」

「初めまして、ねえーっ！ テメーあの恐怖のテスマラソンを忘れたとは言わせんぞー！」

「は……」

俺の威圧にビビッたのか、潤宮わざとやらせぱへたんと尻餅をついた。そして潤む瞳で上田達に。「、かわいこじやねえか。

「ボソッ……女を泣かせるなんてセコトー」

「ぐつー。」

むかつぐが、麗菜の言つてゐることは正しい。

まあ、このメイドさんもべつに俺に危害を加えようとして追つてきたわけじゃなかつたんだ。市民の笑い者になつたのは痛かつたが、許してやらんでもないか。

「……ええと、西園さん。もつ飯つて食べた?」

「え? いえ、わたくし達は才悟様たちがお食べになつた後で食事を取りますので……」

「そか。んじゃ今俺達と食べよつ。腹減つてゐだろ?」

『え?』

驚いたのは何故か西園さんだけじゃなかつた。

「ちよ、ちよっと秋坂才悟! あなたなに勝手なことを……」

「ち、才悟様つ。わ、わたくしでしたらぜんせん構いませんから、どつぞこのまま食事を続けてくださいつ」

「いや、それじゃ俺の気がすまないからそ。それにこれだけの量の飯が俺達の胃に入るわけないだろ? 腹減つてゐんだつたら協力してくれよ」

「べ、べつにお腹なんて減つて……」

さゆー

「…………ふ

「はうーつー わ、笑わないでくださいこーつー」

腕をぶんぶん振り回す西園さんを無視して、俺は厳重朗さんに眼

を向けてた。

「いいですねべつに。たかが一人ぐらい増えたって」

「……ふむ。人数が増えるのは構わないのだが、相手は使用者だからね。他の者達にも示しがつかないし、あまりいい案とは思えないが」

「特に問題ないでしょ。だつて雨宮さんは普通の使用者さんは違う、俺専属メイドなんだから。俺が一緒に飯を食えって言つてんだから従うのは当然のことでしょ？」

「いい加減にして秋坂才悟！ どうして私達が使用者と共に食事を取らなければいけないの！ ここではこれがしきたりなの。いきなりやつて来て私とお父様の食事を不快なものにさせないで！」

麗菜の怒鳴り声を無視して俺は厳重朗さんを見つめ続けた。

「ふう。まあ、たまにはそういうのもいいかもしかんな」

「お父様！？」

「さつすが、話が分かる。つーわけだからせ、ほら、飯食おうぜ雨宮さん」

「で、ですが……」

雨宮さんは俺と怒り心頭の麗菜を交互に見ておどおどして立つ。

「気にしなくていいや。厳重朗さんが認めたことだから、麗菜も一

応納得してゐるつて。それに、飯は大勢で食つた方がうまいだろ?」

「結局、俺の根気に負けて、爾富さんも一緒に飯を食べることになつた。

ちなみに、それから食事が終わるまでずっと麗菜が殺氣を込めた視線を俺に送り続けてた。おかげで肝つ玉が冷えてろくに飯がのどを通らなかつた。うーん、俺そんなに変なことしたか?

第2話・シン・トレーの妹に憎まれて眠れないお話 前編（後書き）

この話、出来ればこの一話にまとめたかったのですが、思いのほか長くなりそうなんで分割しました。基本的に一話完結式で進めていこうと思つてはいるのですが、これが結構難しいです。他の作家さんの技量がよく分かります。

そうそう、これからは後書きにキャラクターのプロフィールをちょくちょく載せていくかと思つてます。せっかくのスペースなんだから有効活用しないとね。というわけで今回はこの人！

秋坂（朝霧）才悟

本作の主人公。スーパーの特売と道端に落ちている小銭をこよなく愛する超貧乏学生。結構イケメン。ボケとツッコミを両立できるが、どちらかというとツッコミ派。性格は基本的に陽気で少し自虐的な面がある。たまに突拍子もない行動を取るため周囲を呆れさせがちだが、意外に頭はキレる。特技はとんずり。趣味は100円ショッピング。座右の銘は「逃げるが勝ち」

第3話・シントの妹に贈られて眠れないお話 後編（前書き）

3話目からさつそく3ヶ月の放置プレイです。序盤でいじめやる氣のない小説も珍しいことでしょう。

「ふおおおおおおおおおおおおお。あたたたたたたたたたたたつー。」

バキツ

「おひかわー！」

「…………何をしてるんですか?」

「いや、この窓ガラス強化ガラスっぽいからちょっと強度でも測るうかと」

「そんな理由でいきなりガラスを叩かないでくださいよ……」

「お、なにこれ？ 売か？」

あ、それは田那様が趣味で集めているものでして」

「ふーん。よし、こいつでボーリングでもするか」

「聞けばそれ一つで普通の軒家が買えるとか」

一
轍でそんなことするなんて非常識だよな、うん」

食事を取った後、俺は雨畠さんに屋敷の中を案内してもらっていた。なにせともあれこれからここで暮らしていくことになったのだからいろいろと把握しておかないといけないからな。それにちょっと食いすぎたから腹（はら）なしをしたかったのもある。

でも問題が一つあった。

「「Jの屋敷（やしき）」」

もうかれこれ一時間以上歩き回っているが、雨畠さんはまだ半分も回っていないらしい。わざわざだけをひょくひょく入れているせいもあるとはこゝで、これはねーよ。

「金持ちってのは大変だよなあ。わざわざクソでかい家を建てて権威を示さないといけないだなんて」

「え？」

「ん？ 違つの？ 僕、金持ちがでかい家を建てるのは他の金持ち連中にバカにされないようにしてるんだと想つてたんだけど」

「あ、い、いえ、聞違つてこるというわけではないと思しますけど、普通はそういうことを考える前に、大きな家に住めて羨ましいなあとが思つものだと……」

「え、そつなの？」

そんなこと一瞬も考えなかつた。なんか「あんたおかしいんじやない？」とでも言われたみたいでちよつとへこんだ。

「……その、才悟様は、変わった方ですね」

「は？」

突然そんなことを言われて俺は面食らつた。

「べ、べつに変な意味じゃないんですよ？ ただ、その、雰囲気、と申しますか……まだお会いしてほんの少しあが経つていませんが、才悟様はわたくしが今まで見てきたどんな人とも違う感性を持つていらして、ふと、そう思つたんです。そう言えば、曰那様が渡してくださつた調査書にも一風変わつていて書かれておりましたね」

「調査書つて、俺の？」

「はい」

「へー。なんて書いてあつたの？」

「確か、えーとですね……。秋坂才悟。16歳。現代ではあまり類を見ない貧乏人」

「こきなりケンカ売つてるなその調査書」

事実だから何も言い返せないけどなー

「生活の詳細は……」

「もつといこよ言わなくて。なんかどんどん俺がみじめな存在になつていく気がするから」

「や、やつですね。わたくしもあれを見たときは我が田を疑いしましたか?」

じつやう俺の生活は田も当てられないうへうこ酔いものじつ。

その後も雨宮さんの説明を聞きながら屋敷内を歩き回つて、ちょくちょく話をしていたのだが、ちょっと気になることがあり、俺はどうしようもなくむずかくなつてきたので思い切つて言つてみた。

「あのや、雨宮さん

「はい、なんですか才悟様

「それ。その才悟様つての、やめてくれないか? どうにも恥ずいんだけど」

様付けがとても似合つていないと自覚が俺にはある。根が貧乏人だからな。だから彼女から『才悟様』なんて言われるとひじょーに背筋がかゆくなる。

「はあ……でしたら、じつお呼びすればいいんでしょうが。『人様』ですか?」

「そんなん笑顔で言われたら俺萌え死にしちゃうからダメ。無難に『才悟さん』とかでいいんじゃないの? なんなら呼び捨てでも構わないけど」

「あー、とりあえず落ち着け。まずは深呼吸をするのだ」

「は、はい。すー、はー、すー、はー」

「落ち着いたか？ 落ち着いたな？ ではその状態を維持しつつ上
目遣いから満面の笑みでかわいく『お兄ちゃん大好き！』と言つが
いい」

「え、えーと……お、お兄ちゃん大す……つて何言わせるんですかあーーー！」

……やばい。不覚にももえた。もちろんくさがんむりの方で。

俺が聖なる『お兄ちゃん』ヴォイスに感動していると、兩富さんはバカ正直に実行した自分の無垢さ加減に呆れるのと口説の恥ずかしさにより足元がお留守になり、足がもつれてお倒れになった。ごめんごめんと謝りつつ手を差し出そうとして俺はそこにヘブンを見た。

さてここでテメエらに質問だ。お前らは絶対領域なるものを知っているか？ は？ 知らない？ いいや貴様は知っているはずだお前は自分の心に嘘をついているに過ぎない認めろ認めるのだこれは一般常識なのだと！ さて、テメエらの頭に併の領域がぽわぽわと

浮かび上がってきたこれからが本題だ。すばり聞こつ。その絶対不可侵なる領域の、さらに向こうには一体何が広がっているか知つてゐるか？もしかしたら知らないかもしないな。だが俺は知つてゐる。ちょうどいい機会だ。知らないもののために俺がその領域の名前を教えてやるつ。

女体の神秘と言つても過言ではない、絶対領域の先にある絶対空間、その名も ”PANTU” と言つ。

今こそ俺の秘密を明かそう。俺の体の半分はエロスでできている。「きやつ！ さ、大悟様どじをじ覽になつておられるのですか！？ 見ないでくださいーー！」

「えー」

「えー、じゃないですつ！ 何考えてるんですかあなたはー！」

「”PANTU”のすばらしさを大衆に広く知らしめるにはどうすればいいか考えておりました」

「そんなこと考えなくていいですー！」

「いやー、それにしても雨宮さんなかなに過激な下着つけてるねー。もうちょっと清楚な感じのする下着も雨宮さん似合いそうだけど、こっちの方が色っぽいね。へつへつへ、姉ちゃんいいもん持つとるのーー」

「ふすつ

「『わやあああああああ！』め、田があああああああ！」

突き出された細くて綺麗な指が俺の田玉にクリーンヒットした。痛い。文字通り血の涙を流しそうなほど痛い。

「も、申し訳ありません才悟様！ わたくしつたらつい……！ あなんてことをわたくしは……！」

「い、いや、今のは完璧に俺が悪かつたから……」

ふう……俺としたことが、我が人畜無害の紳士の理念を崩壊させてしまったぜ。どうも俺はこういう突発的なエロティックイベントに弱い節がある。今後は気をつけなければ。まあ、今見た光景は一生忘れないがな！

「ああ、それと戻れやん」

「は、はひ！？ か、かかかかか覚悟はできております！ どんな罰も受ける所存です！ そ、それと、わたくしめも一応一人前のメイド故、そ、その……お、おおおお、お望みとあらば……多少えつちなことでも……」

「今夜ノーパンで俺の部屋へ来い」

「ふええええつ！？」

いかん、あまりに魅力的な言葉につい本音が。

「冗談冗談。てか、俺が言いたいのはそんなことじゃなくて、名前」

「……はこ？」名前、と聞こめると……？

「あのね、君はさつき俺が言つたことをもう忘れたのか？」

「あ

「まったく、たった數十秒前の話だといひのよ。細々れん、おわか若年性健忘症？」

若年性健忘症？

「つて！ 才悟様が変なことを言わせるからわたくしが転んだりしていろいろ場が混乱したんじゃないですか！」

「バカヤロウ。この俺に仕えるところのならその程度さらつと受け流して見せる。……いや待て、そうなるとせつかくのリアクションを楽しむことが出来ないな……やっぱり、存分におおおおおおしててくれ」

「ほり、また」

「うう……で、でも、やはりわたくしはあなたに仕えるものであつて、決して対等な立場に立つものではないのですよ？ 必要以上に仲良くしてしまつては……その、間違いが起こらないとも……」

「雨宮さんは間違いを起しそつもりなの？」

「い、いえ！ わたくしなんかが滅相もない。」

「じゃあ、問題ないだろ。俺がいって言つてんだから、気にしないでよ」

「……や、そういうわけには……」

「……俺はね、正直言つて、どちらかと言えば一人でいることを好みだ。必要以上に誰かの助けを借りるつてのが個人的に気に入らないでね。だから本音を言えれば、君みたいなメイド、俺には必要ないんだよ。」

まあ今は、ここにいる以上はそういうのが俺の傍にいるのも仕方がないって妥協してるけどね。俺だってメイドさんの仕事を奪つてまで安いプライドを押し通したいとは思わない。でもどうせ傍に置くななら俺は爾宮さんと仲良くなりたい。友達として……とまでは、さすがに言わない。でも、主人と従者の関係つてだけは止してくれ。俺は様付けなんてされる柄じやない。頼むよ、爾宮……真奈美さん

好意の印も込めて下の名前で呼んでみる。真奈美さんは少しめたふたとしたけど、俺が真剣に見つめ続けると、観念したかのようこ

肩を落とした。

「……ハア。分かりました。それでは、これからあなたのことを、才悟さん、と呼ばせていただきます」

「うそ、それでいいよ。よしよし、素直な子は好きだよ俺」

「あ、頭をなでないでくださいよ……」

「お、照れてる照れてる」

「べ、べつに照れてなんていませんよー」

「（ぐつ）ナイスツン『レ』だ、真奈美さん」

「そんなんじゃありません~。」

「ははは」

「~~~~~」

「おひといひと

ムキーッ、とでも言ひやうなほど仕事で俺を威嚇する
と、真奈美さんはふんすか起こりながらわざと先に行ってしまった。
あいや、少しいじり過ぎたか。

「それにしても、主人をほっぽり出すメイドってのはどうなんだ?
……まあ、俺としてはこっちの方が嬉しいけどね」

これから的生活、正直不安だらけだったけど、なんか、うまくや
つていけそうな気がしてきた。

「おーい、待つとくれー」

少し小走りで真奈美さんを追つて角を曲がる。

「……瞬間移動?」

クソ長い廊下には真奈美さんの姿はなかった。

「まあ現実的に考えて消えるわけないわな」

おやべりべりの通りのビルかの部屋に身を潜めているのだろう。ま

つたぐ、少しかわれたぐらいで拗ねひきつて。うむ、かわい
ね。

とりあえず俺はテキトーに近くの部屋を開けてみた。

そこに、下着姿の我が義妹がいた。

』
.....
『

麗菜、現実を認識できず硬直。

俺、麗菜の胸をガン見。

沈黙を打ち破ったのは俺だった。

「不合格」

「ちよつと…じこ見て言つてのよあなたつ…」

「いや、だって、ねえ？ うつ、あまりの貧相で涙が…

「貧相つて言つなあああああああああつ…」

「それになんだよお前その格好。下着だけじゃねえか

「じょうがないじゃない着替えてたんだからつ…」

「バカヤロウ！ 着替えてる最中ならなおさら服を着崩した状態じゃないとダメだろうがつ！ いいか、女の下着ってのはなあ、乱れた衣服からチラツと見えるのが一番萌えるんだよつ！ そんなことも分かんねえのか貴様わつ！」

「知らないわよそんなのっ！ それよりいつまで見てるのよっ！」

「お、いいねシーツで身を覆うその姿！ 本人は隠せているつもりで微妙に見え隠れする下着が大変ぐつじよぶです！ 合格うつ！！」

「ぜんぜん嬉しくないわよバカアアアアアアアアアアアアアツ！！」

しかし、まあ、綺麗なことだ。

一見平常心を保つてゐるよつと見える俺だが、内心は結構いっぽいいっぱいだつたりする。さつきも言つたが、俺は振つて沸いてきたエロイベントに弱い。加えて、麗菜は口は悪いがそれを除けば、俺が知るどの女よりも綺麗で……その、かわいい。胸は正直これからに期待だが、細くすらつとした手足に、キュッと締まつたウエスト。神ががり的なまでに整つた顔。そんな女が、俺の前で下着姿でいるのだ。これは、なんというか……卑怯だ。

「助けて修司っ！ 変態ノゾキ魔に犯されるーっ！ー！」

「い！」

「きなり何言い出しあがる」のアマ！ ヤバイビうしよつ。客観的に見て悪いのはどう考へても俺だしこれじゃ言ひ訳のじよつが

「そこまでです」

いつの間にか叩き伏せられて拳銃突きつけられました。

「ちょっと つー！ なにこの急展開！？」

「黙りなさい、一言でも喋れば心臓を打ち抜きます」

「（ひいひいひいひいひいひい）」

「く、バカな！ 今まで幾度となく暴君を退けてきたこの俺が、なんの気配も感じないまま呆気なく組み伏せられてしまうとは！」

「我が主、朝霧麗菜様に対する不埒な行為。人生を七回捧げようとする償えない罪です。覚悟はできていますね？」

「あなたこそ、覚悟はできているのでしょうかね」

「ー？」

俺に銃を突きつける男が驚いて振り返ると、そこには日本刀を突

きつけて仁王立ちする 真奈美さんがいた。

「まさかの救世主キタ ッー！」

もつ何がなんだか。

「奥歯をく、ですか？」
「これは一体どつこい」とじょうつか

「それはじつらの台詞です、伊達さん。あなたは誰に向かつて銃を突きつけておられるのですか？」

「誰、と言われましても、不埒なノゾキ魔」……

やう言つて男は初めて俺の顔を見た。
「お、スゲエ美形の兄ちゃんだ。

「や、才悟様！？」も、申し訳あらません、とんだけ無礼を…」

慌てて俺を解放してひざまづく兄ちゃん。えーと……。

「真奈美さん、説明プリーズ。俺訳分かんないんですけど」

あと、できればその日本刀しまつてください。メッサ恐いっす。

「あ、はい。えつとですね、その方は伊達修司だてしゅうじさんと仰つて、麗菜様専属の執事なのです」

「え、執事？」

「はい、ご覧の通り」

真奈美さんに促されて視線を送ると、

「「」のバカ修司…なんであこつを解放してゐるのよ…」

「し、しかしお嬢様、の方は先刻ご報告にあつた秋坂才悟様なのでしょう? 私ごときが手を出すわけには……」

「何言つてんのよ根性なし! いい? あいつはあらうことかこの私の下着姿を見たのよ! ? こ、この、私の、誰にも見せたことない、ああああらのない姿を! しかも! あらうことか私の胸を侮辱するなんて! 修司つ! とにかくそいつ殺つちやいなさい! ！」

「お嬢様。あなたは朝霧家の娘なのですから、そのような物騒な発言は控えてください……」

「つるさこつるさこつるさーー! いいからやつせとそいつ殺しながらよーー! ！」

……うん。俺、将来執事にだけはなりたくねえわ。

「にしても、ずいぶんと若いな。執事つてもつとこいつ年配のイメージがあつたんだけど」

「ええ、年配の方の方が細かい気配りもできますし、また人生経験が長いですでの主人の相談事に乗つたりできますからね。ですが、彼は若輩ながらも執事としての実力は一級です。主人の身の回りの世話から危険分子の排除まで、たつた一人で対応可能です。かくいうわたくしも、才悟さんを全力でサポートするため、一級のスキルを持ち合わせております」

それでの日本刀つか。

「それにしても才悟さん。いくらなんでも初日に麗菜様の着替えをノゾクなどと、不謹慎極まりないですよ」

「ちょ！ それ誤解！ てか真奈美さんが急にいなくなるから探しでたんじゃんか！」

「だ、だってそれは才悟さんがおかしなこと仰るから……」

ああマズイ。また話がややこしくなつてきた。思考がうまく働かねえ。

「だあああああああ！ と・に・か・く！ テメエら全員そここ正座しやがれ つ……」

「囚人点呼一、開始つ。雨宮真奈美！」

「え、えと、はい！」

「伊達修司一」

「…………」

「朝霧麗菜ー！」

「あんた何様？ 死ねばいいのに…………」

「のアマ、シバき倒したるか。

しかも奴め、俺が正座しろと言つたのに一人だけベッドに座つてあまつさえ携帯をいじり出すとは。こんなのが日本を担う大企業の娘だと思つと心配でしょうがない。

「ハア。まあとらあえず、真奈美さんにはあとで『30秒間パンツガン見の刑』に処するとして……」

「えー？ それって本氣ですかーー？」

「バカ言え、本気なわけあるか」

「そ、そうですよね。もつ、驚かさないでくださいよ…………」

「俺が本気になつたら、『一日中ノーパンの刑』に処するに決まつてるじゃないか！」

「爽やかな笑顔でサムズアップ ッー？」

真奈美さんは正座から体育座りに移行してしづしづと泣き始めた。ああ、かわいい…………。

「そんで修司さんだが……まあ、本人としては主人を守りつつとして

の行動だつたんだし、その忠誠心に免じて不問ひ一ソヒド

「あつがとわざれこまか」

「で、最後に麗菜なわけだが……」

「気安く呼び捨てにしないでくれる? 虫唾が走るから」

「じゃあ、レイピヨン」

「変な名前で呼ばないでよー.」

「なんだ、うわわ風は好みじゃないか。ならレイヒヤン」

「好みとかそういう問題じゃないからー.」

「わら興奮するなよマイシスター」

「妹つて血つなーつ……」

「わらわら奴だな。

しかし、ずいぶんとまた嫌われたもんだねえ。

「まったく、こんなイケメンな兄貴が出来て一体何が不満なんだか」

「ハア? ブサメンがホラ吹いてんじゃないわよ」

「…………（ピキッ.）」

おーけー。落ち着け俺。ここは年下。俺年上。ここは大人の振る舞いを見せねば。

「まあそう嫌うなよ。さっきのはその、確かに俺が悪かった。ごめん。反省してる。だが、お前だっていけないんだぞ。そんな綺麗で魅力的な体をしているんだから。男なら飛びつかない方がおかしいんだよ」

「つざい、きもい、喋るな」

褒め殺し作戦、失敗。

「……そ、そうだ。俺、こいつ見えて肩揉みとかすげー得意なんだ。お前、肩こりてないか？ もしそうなら俺が揉んで……」

「寄るな駄犬」

スキンシップ作戦、失敗。

「…………そ、そう言えば、麗菜って今年で高校生になるんだよな？ いやー、麗菜って頑良さそうだもんな。きっといい学校に決まつたんだろうな。でもさ、進学となるとやっぱいろいろ不安とかあるよな。そうだ、もし勉強で行き詰るようなことがあつたらさ、俺が教えて……」

「あんたみたいな低能に教えてもひりひりいなら小学生に聞いたほうがマシよ」

「…………（ペキッ）」

「や、才吉さん落ち着いてー。」

「離してくれ真奈美さんー。」の生意気だったんが俺のことを『お兄ちゃん』って呼ぶやつに調教してやるー。」

「お、お嬢様落ち着いてくださいー。」

「離しなさい修同一ー。」の意識過剰なブサメンに口乳の轟かされ叩き込むのよー。」

俺と麗菜はメイドと執事を振り切って対峙する。

「おもしろいこ、自他共に認める口乳スキーであるこの俺が、貴様のよつなつねたに屈するとしても?」

「悪いこと言わなこわ。今すぐ土下座しなさい。やつわればお仕置きだけは勘弁してあげる」

「はい、やつてみさりや」

俺はよしーの表情でふんぞり返る。何をするかは知らないが、今まであらゆる危機を乗り越えてきたこの俺が、こんな口り娘にやられるなど、それこなべーくサーベルでも持つてこない限り

「ゴンッー

「やつ、外した」

サーベルはなかつたけど、ハンマーは持つてました。

「待てーいっ！ テメエ今俺が避けなかつたら間違いなく潰されてたぞ！？ ていうか『10t』つてお前化け物かよー！」

「うひさいわね！ いいから黙つて挽肉になりなさいー！」

「きや つー！」

第一次兄弟戦争、スタート。

結局、建物内と言わず屋敷内を完璧に把握できるぐらい追っかけ回されましたよ。自分、一睡もできなかつたですよ。しかもばたんきゅーしたバカを背負つて帰るのは俺の役目でしたよ。

とにもかくにも、こんな感じで朝霧才悟の記念すべき一日が幕を閉じた。

……俺、これからホントにやつていけるのかな。

第3話・シントレの妹に憎まれて眠れないお話 後編（後書き）

うーん、ラストの方はもう少し話を広げたかったんですけど、現段階では才悟と麗菜のロゲンカくらいしか書けないですからね。あんまりだらだらするのも嫌いなんでちょっと無理やりまとめました。まあ、この話は屋敷内での主要人物の紹介的な意味合いを持つていたので、その点はクリアされているのでよしとしましょう。

さて、次回からは彼らの春休みの日々をつらつらと何話か書く予定なのですが、はつきり言って内容はまったく考えてません（マテ）。まあ基本的に作者はパソコンの前に座つてから内容を考え始める超無計画野郎なんで、次の話も妙なテンションだつたらそれなりのが書けるでしょう。あんまり期待しないでくださいね。感想お待ちしてます。

第4話・サイドストーリーへなると、つい、ヤクザうんだ（前編）

才悟の変態キャラが確立してきた今田の頃。

第4話・サイドセリフにならないといふ、つこ、ヤシナキつんだ

椅子に腰掛けて見上げると、薄っすらとだが朝の月が見えた。

「ふう。少し暖かく、気持ちのいい風が吹くテラスで、景色を楽し
みながらお茶を飲む。優雅だなあ」

俺は紅茶を口に含んだ。

そして火を噴いた。

「お、お嬢様！ 一体どこからタバスコなんて取り出したんですか？」

「ふ、こんな」ともあらうかと、厨房から拝借してきたのよ」

「あわわわっ！ さ、才悟さん大丈夫ですか！？」

「あつはははははなにその顔！？
ふつ、カツコわるー」

「どうでもいいからせつさと水寄せせつせつ…。」

「 しょ う が な い わ ね 。 は い 水 」

痛い！ 辛いを通り越して痛いよママン――

「ふん、これに懲りたらどうとこ」の家から出て行くことねクズ」

「——このクソアマアアアアアアアツツツツ—— 朝ぐらい静かに過ぐ
そうと思ったがもう我慢ならねえつ——！ そこになおりやがれ！

「ばつー、ど、じやくせに紛れでどーに触つてんのよこの変態つ！
修司、このクソバカを田も当てられないぐら、グロテスクに殺りな
さい！」

「だから、お嬢様、何度も言いますがお言葉には気をつけてください。それに、今回の件は明らかにお嬢様が悪いござります」

「にゃにー！？ あんたこの私を裏切つてこんな奴の味方するつもり！？ お父様に言いつけてやるつ！」

「ああお嬢様私が悪かつたですからハンマーをむりやくむりやくに振り回さないでください！　才悟様が文字で表現することはむりばかれない

る酷い状態になつております！」

「へんなやーーー！ みんなして私をバカにしてーーー！ どうせ私は真奈美と違つて貧乳よ悪かつたわね悪かつたわよーーーめんなさいねえ！ ？ こんな脂肪の塊のどにがいって詛うのよーーー！」

「だ、誰もそんなこと言つて……きやつ！ れ、麗菜様、そ、そこは……つーん……は、やあ、だ、だめ……」

「その手を離しやがれつるべたがーーつ！　真奈美さんの乳を揉んでいいのは俺だけだーーつーー！」

「そんなこと許可した覚えありませんよーっ！」

…みなさん冷静に！ああせこなんて私は…かりこんな役目を…

今日も今日とて、俺達の朝は賑やかだった。

俺が朝霧家の養子になつてから、それなりの日数が経過した。

最初は戸惑うことばかりで精神が磨り減つたが、さすがにそろそろ慣れてきたのか屋敷での生活には順応してきていた。真奈美さんに朝起こされてそのままおはようのちゅーしたり、麗菜の振り回すハンマーから逃げるスキルも上がり気がつけば奴の調教も進んですっかり俺の奴隸にしてやつたし、溜息をつく修司さんの困った顔を見るのも、みんな日常風景と化しているぐらいだ。（一部若干のフェイクが含まれています）

じゃあ思う存分春休み満喫すっかー！……と思ったけど現実はそんなに甘くなかった。厳重朗さんめ、本気で俺を次期当主にするつもりなのか、帝王学などの類を勉強することを俺に強要してきた。最初は拒否つたが、それなら借金の返済はどうするとか脅されたり麗菜に「お父様、こんなバカに学ばせるのは”低能学”で十分ですよ」などとふざけたことを言われたのでついムカツとなつて承諾してやつた。今では心の底から後悔している。リーダーとしての心構えなんぞ知りませんですよ。

ちなみに先生は真奈美さんだ。この人、ただの天然ドジッ娘だと思っていたが、意外にも本当にいろんな面で一級だつた。甲斐甲斐しく身の回りの世話をしてくれるし、教え方もうまかつた。この前気配もなく修司さんの後ろを取つたことからも運動能力高そうだし、なんというか、こういうのを完璧超人と言うんだなあと思った。

しかし、そこはやっぱり真奈美さん。ここぞというところでドジッ娘属性を発揮して大失敗を犯してくれる。俺の愛情表現にも實においしい反応をしてくれるしね。メイドさん最高！

……最高すぎて俺自身が堕落しないかが目下の悩みでもあるんだがな。

でもまあこりんなのは贅沢な悩みだよなー、と思いながら、俺は広い自室にまづりんと置かれている机に座る。時計を見れば、そろそろ真奈美さんが来て授業が始まる時間だ。今日は一休どのよつた辱めを『』えてやるうか、くけけ。

「今日はお勉強はお休みにします。『』ゆくつなせてくだれこ」

部屋に来た真奈美さんは笑顔でそう叫ぶとすつたかと出て行きました。

「俺の素敵な妄想を返せーーー。」

俺は悲しみの涙で枕を濡らした。生殺しなんてひどこよまなんん！

「ちくしょー。なんでいきなり休みなんて言こ出すんだよー。」

ふむ、やはり授業中にいじめすぎたせいだろつか。でも俺に学を教えることは厳重朗さんから言こつけられてる」とのはずだから、勝手に休みをあたえるなんて……いや、教育過程はすべて真奈美さんに任せているのなら不自然ではないか……？

「やつぱつ、これからほいたずらもほじめにした方がいいかな」

事故を装つたパイタッチはアウトだろつか？ さつ氣なくパンツをのぞくのはセーフだよね？

「しかし、休み、休みねえ。何しよかつなー」

よく考えたら、最近は学校もバイトもないはずなのにいつもより忙しかったからなあ。まとまつた時間がとれたのは久しぶりだ。外に出かけるのもいいけど、これを機に屋敷の人とさらに親密になるつてのもありか。どうしようかな。

1・食堂に行く

2・庭に出て見る

3・コサックダンスで町を徘徊する

さて、出ました俺の未来を決める選択肢。妙な選択肢が混ざるの
は「愛嬌だ。

俺としてはぜひとも3を試してみたいのだが、実際にそんなこと
したら下手すりゃヤンキーに絡まれかねないので遠慮するとして、
食堂か庭か。

.....。

「よし、決めたぞ！」

4・部屋でだらける

はっ！既存の選択肢に縛られる軟弱な主人公とは違うのさー。

「では、思う存分だらけさせてもらおう」

だら～

だら～

だら～

だら～

だら～

だら～

はい、飽きました。

「てか、よく考えたらこの部屋娯楽系がなんもねえんだよなあ」

無駄に広いばかりで、あるのは勉強時に使う机とホワイトボード、それと小難しい本ばかり入った書棚。あとは真奈美さんが淹れてくれたお茶を楽しむテーブルセットと、ふかふかベッドしかない。

……あれ？ これって本当に高校生の部屋ですか？

あ、ありえねえ。今時ゲームどころか漫画や雑誌の類すらないなんて！ そりや俺は元々貧乏だったからそんなに娛樂的な物は持つてなかつたけど、空いた時間を潰すぐらいは出来たというのに！ この部屋で一体どうやって時間を潰せと！？ 枕投げでもしきつてか！？

とつあえずやつてみた。

「あ、やつたなー。それじゃあこいつも、それー。あはーー」

観客のこない一人だけにしてこじはないと俺は学んだ。

「だ、ダメだ！ こまかじやこけないー なんとかここの田舎しき状態を打破しないとー。」

街に出て小説でも買つていいよつか。いやでもたつた一田殿を潰すためだけに本一冊買つなんて俺にはとても……。

あ、そうだ。

「俺んちから俺の私物よこしてもうればいいじゃないか」

いきなりヘリに拉致られてそれ以来家には帰つてないから、今の俺は携帯すら持つてない。そうだよ、なんで今までこんな大事なことを放置してたんだろう。あの家には俺の大事なものがたくさんある。そう、友人に『俺が死んだらこいつらを棺桶に入れてくれ』とすら頼んだ命の次に大切なお宝 ハロ本が。

はっ！ ビうせ俺はハロスさ！

「おーい真奈美さん。来ておくれー」

ピー、と笛を吹いて俺は真奈美さんを呼ぶ。笛は真奈美さんが「何か御用があありでしたらそれを吹いてお呼びください。屋敷のどこからでもかけつけます」と言ってくれたものだ。試すのは初めてだが、こんなちやちな笛で本当に呼び出せるのだろうか。

「お呼びでしようが、才悟さん」

すげえ。吹いてから5秒で登場してくれた。
なぜか天井から

「忍者かあんたは！」

「はい？」

何か変でしょうか、と言いたそうな顔で真奈美さんは首をかしげた。なんだろう。俺は至極正しいシツコミをしたはずなのに、どう

してこんな顔されなきや いけないのだろう。

……ああ、そう言えばこの人天然さんも入ってたね、そういうや。

「それで、御用はなんでしょうか？」

「ああ、うん。あのさ、俺つていきなりこの家に住むことになつて前の家の物を持つてくる余裕とかぜんぜんななかつたでしょ？ だから出来れば私物を取りに行きたいなーと思うんだけど」

「あの、知らないんですか？　悟さんのお母でしたら、既に引き取られていると思いますけど」

「なんだかとある種の運営の仕事で忙いんだよ。でも、おまえがおまえでいいんだから、おまえの仕事はおまえの仕事だ。」

「え、どうしたんですか？」いきなり大声を上げて……」

「シットツ！ マジかよマジなのかよマジなのですかよ！？ ヘイ、ミスマアマミヤ！ てことはオイラの個人的な所有物もまとめて廃棄されちゃったのですかい！？」

「せこ、
めんぐく」

「神は死んだつ！！」

俺は再び枕を濡らす羽田となつた。

か、勘違いしないでよね！　これは涙なんかじゃないんだからね！　ホントなんだからね！

腹いせに真奈美さんをからかつた後、俺達は失われた帝国を取り戻すために旅に出た。

すまん、嘘だ。ホントはただ調度品やらを買いに街に来ただけだ。あまりの私物のなさに苦言を呈した俺に真奈美さんが提案したのだ。

もちろん厳重朗さんにも許可はもらつてある。しかも、「お金はいくら使つても構わないよ」と田玉が飛び出るほど嬉しいお言葉までぐださつた。俺の中で厳重朗さんの地位が神に上り詰めた瞬間である。

「さて、それでは才語さん、一体何からお買い求めになりましょうか？」

そう言つて俺の傍らに立つ真奈美さんは今となつては見慣れたメ

イド姿だ。ただし街の方達にはそうではなかつたようで俺達はものすつゝい注目を浴びていた。そりやそつだ。日常的にメイドが徘徊するような街は某電氣街などの特殊な場所だけだからな。

んで、羞恥プレイの原因となつてゐる真奈美さんはそのことをせんぜん意に介していな。なので俺も何もツツ「まなかつた。」いつときは堂々としてればいいのだ。

「うーん……マネーがインフィニティだと逆に何から買えばいいのか迷うな。」ここはまずマイ茶碗からか？」

あまりの所帯つぱりに言つた俺自身が泣きたくなつた。どこまでも貧乏性が染み付いた我が精神。存分に笑つてやつてくれ、ははは。

「とりあえず、以前の家にあつた私物の類から当たつて行つてはどうですか？」

「そうだな、そうするか

というわけで、俺の私生活においてもつとも必要なものは何かを思い浮かべながら俺達は歩いた。すると、俺の足は水を得た魚のようにスムーズに動いて、エロ本屋にたどり着いた。

「才悟さん

「なんだいまなんみん」

「歯、食いしばつてください」

店内に入った瞬間に放たれた容赦ない平手に意識が飛びそうになつた。いや、もちろん冗談でしたよ？ さすがの俺もおんにやのこ

連れてエロ本買つような度胸はないですよ？ 本当ですよ？

「まったくオ悟さんは… 次へ行きますよ次へ…」

「はいっす」

気を取り直して別の場所に向かう俺達。

向かつたのは大人なビデオ屋さん。

日本刀の輝きを見た瞬間に俺は土下座しましたよ、ええ。

さすがにこのままだと完全に真奈美さんに呆れられてしまうので
真面目にすることに。ついでまずは携帯ショップ。

「い、い、いですか？」

「そうだけど？」

何故か真奈美さんが気後れしている。べつにエロいものなん
てないはずだが。携帯が美少女に擬人化しているのならともかく。
「やっぱり携帯がないといろいろ不便だからな。真奈美さんと番号
とか交換したいし」

「はえ！？ ……そ、そうですね、はい」

笑顔の裏に困ったオーラが隠れていた。どうしたんだ？……まさか、俺と番号を交換するのがイヤとかじゃないよね？

「うーん、いつもなら携帯なんてゼロ円の奴しか買わないんだけど……」「……

ふふふ、今の俺には厳重朗さんという最強のバックアップがいるのだ。ここは優雅に最新機種をゲットだせ！

4万5千円。

「ぐふっ」

「えっ！？ なんでいきなり吐血なんですかー！？」

早くも挫けそうな俺。俺は諭吉さん一人で補えない買い物を前にすると精神的にダメージを負うのである。

「ゼロが……ゼロの大群が……襲い掛かってくる……！」

「さ、才悟さん？ あの、お金ならありますから、遠慮なんてしないでいいんですよ？」

「そ、そうだよな！ 今の俺金持ちはもんな！ 勝ち組だもんな！ これぐらいの買い物どうつてことないよな！」

意を決してサンプルを掴む。

「つー? 」「こいつ、重いぞー! ?」

「えっと……普通に軽そつですけど?」

「違う、こいつは物理的な重さじゃねえ……。これは、金の重みだ……ッ!!」

俺は諭吉さん一人で補えない商品を手に取ると通常の10倍の重みを感じるのである。

「くっ、やはり俺に最新機種は荷が重すぎたか。うーん……そうだな。なあ、真奈美さんがどんな機種使ってるのか教えてくれない?」

「はひ! ? わ、わたくしのですか! ?」

「うん、」のままじや長引きそつだから、真奈美さんと同じような機種にしようかと思つて「

「そ、それはとても恐縮なんですけど、でも、あの、わたくしの使つているのなんて大したものじゃないですから! 」

「ああ、性能の面は大して気にしないから大丈夫だよ」

最低限電話とメールが使えればあとは適当でいい。

「とりあえず真奈美さんの携帯見せてくれよ」

「だ、ダメです! 」

「え、なんで?」

「だ、ダメなものはダメなんです！」

もしかして、俺なんかに携帯を見られるのなんてたまらないわといつことなんでしょうか。すまん、誰かハンカチかティッシュを用意してくれ。俺の柔な心が今にも決壊しそうなんだ。

「ぐすり、『めん真奈美さん。俺なんかが真奈美さんとペアルックなんて図々しいよね。えぐつ、俺なんて目の前にいられるだけで不快だよね。ブサイクで『めんなさい。生まれてきて』『めんなさい』」

「や、やつこいつとじゃないんですよ。べつにオ嬢さんに意地悪してるわけじゃなくて……」

「じゃあ、見せてくれる?」

「だ、ダメです!」

「鬱だ、死のう」

「…………！ わ、分かりましたからー。ちょっと待つていてくださいこいつー。」

唐突に真奈美さんは店を出て何処かへと走り去つて行かれた。訳が分からずその場で呆然としていると、数分と立たずには真奈美さんが舞い戻ってきた。

「い、これが私の携帯です!」

「い、これは……ー」

……黒電話？

「さあ本語でー！ 番号を交換しましょー！」

「ああ、うん。その前にひとつこいかな？」

「なんですか？」

「これひこせ、『冗談だよな？』

「あ、あの……こちおひ、本気、なんですか？」

「あんまり舐めた」と皿のとシバベゼ「」

「だ、ダメ……ですか？」これだつてほり、ちよつと古こですけど、操作も簡単だし、ちゃんと電話も出来ますよ？」

「真奈美さん、いー」と教えてあげよ。携帯つてことは、携帯電話の略なんだ。常に携帯できる電話だから携帯電話

「だ、大丈夫ですよー！」れだつて、リュックなんかに入れて運べば十分携帯できます！」

「どこの世界にそんな重いもん背負つて街歩く奴がいるんだよー？しかもそれじゃ番号もメアドも交換できねえよ！」

「め、めあど~。」

おこおこねい嘘だら嘘だと叫びてくれよ真奈美さん。

「なあ、もしかして、真奈美さんってさ、携帯持つてないの？」

「…………はい。その、恥ずかしながら、わたくし、機械はどうしても苦手でして」

「クエスチョンワン。パソコンを立ち上げるにはどうすればいいですか？」

「ええつー!? パソコンって立ち上がったりするんですかー! ?」

なんだこの天然記念物。ホントに現代日本の10代か?

「うう、呆れられた…やつぱりわたくし変なんですね…だからダメだつて言つたのに…」

一応直観はあつたらしい。

「しかし、携帯すら扱えない機械音痴か」

ちよつと天然だけどそれ以外は一級じゃなかつたのか、真奈美さん。いや、俺としては新たな萌えポイントが見つかって嬉しいんだけど。

「じゃーちよつてどこいや。これを機会に真奈美さんも携帯買おうぜ」

「ええーーー？ わ、わたくしが携帯をつーーー？」

そんな驚かんでも。

「真奈美さん、これからはデジタルの時代なんだから、苦手でもちよつとは慣れとかないこれから大変だぜ。大丈夫、使い方なら俺が教えるからさ。」

「で、でもでも、メイドであり先生でもあるわたくしが才悟さんに教えてもらひなんて……」

「ぐすっ。そつか、真奈美さんは俺みたいなクソ野郎なんかには教えを乞いたくないんだね（泣）」

「わ、分かりましたからー。携帯買つて才悟さんに教えてもらひますから自虐モードに入らないでくださいーーー！」

てなわけで、俺と真奈美さんの記念すべきお買い物第一品目が決定しましたとや。

それからも適当にぶらつきながら調度品を買つてあさり（宅配郵送だから手荷物なし、なんというブルジョアぶりーーー）、ちよつといい

時間といつことで休憩と昼食を兼ねてファーストフード店に入った。ポテトの値段がぼったくりとしか思えない意外は財布に良心的なあの学生の味方である。

「…………あの、バーに入るんですか」

「ん？ なんか問題ある？」

「いえ、その、食事と休憩を取る、といつ目的は達することができるのは思っていますけど……その、なんというか、いろいろと雰囲気がそぐわないと言いますか……」

残念ながらメイドさんの味方ではなかつたようである。

「せうかなあ。べつに問題ないと思つたけど。まあ、俺じいじの年頃なんてそこいらじり歩いてゐるし」

ハア、と真奈美さんは溜息。

「才悟さん、失礼なことを言つますけど、今まで女性の方にモテたことはありましたか？」

「ははは、なんだい真奈美さん嫉妬かい？ でも大丈夫、生まれてこの方女の子と付き合つたことなんてないNE！」

涙を流しながらサムズアップする俺。ち、違う！ 僕が悪いわけじゃないんだ！ 出会いがなかつただけなんだよおー！

「やつぱり。才悟さん、いい機会だから言つておきますが、あなたには女性をエスコートするのが下手すぎます。いいですか才悟さん、

紳士といつものではありません、常に女性の方を気にかけるものであつて……」

なんだか知らないが真奈美さんによるジョントルマン講座が始まつた。

いや、まあ、真奈美さんの言いたいことはなんとなく分かるんだ。俺だつてそこまで頭は悪くない。つまりせつかくのデート（と思つていいよね？ よね？）なんだからもつと小じやれたカフェみたいなどここでランチとか食べて食後はコーヒー片手に語らいましょうよということだらう。でも「めんね、俺は生まれてこの方そんな飲み物一杯だけでコンビニ弁当が買えてしまつよつた店には入つたことないし、そんな勇気もないんだ。だつて俺はドケチだから！」

なんて真奈美さんの講座を聞きながら自虐モード入つてたら列が進んでもう俺達の番は田の前だつた。俺は何とか真奈美さんにファーストフード店の良さを説いて納得してもらい、ちょいびといタイミングで俺達の番となつた。

「わあ……ハンバーガーつてこんなにたくさん種類があるんですね。わたくし、こうこうつところは入つたことなかつたので驚きました」

俺としては真奈美さんのメイド姿を見ても一転の曇りもない笑顔を浮かべてる店員さんが驚きだつた。この店員……やるー

「あうー、じんなにいっぱいあると迷います。才悟さん、何かお勧めつてありますか？」

「やうだなー」

待つてました、とばかりに俺の脳みそはフル回転。そして鮮明に映し出される未来の妄想。^{ガイジヨン}

『あう！ む、大きすぎて食べれませんよ才悟ちゃん…』（かぶりつけない大きさに涙目）（真奈美さん）

イケルツツツ…!!

「これだ真奈美さん。これを食べなさい。ていうかこれ以外は認めません」

「は、はあ……それじゃあわたくしはこれで

グツ！（隠れてガツツポーズ）

「はい、こちらのセットですね。そちらのお客様はどうなさいますか？」

「あ、はい。それじゃあ俺は…」

そう言つて俺が指差そつとするのはこの店で一番高いセット。そう、今までまったく手が出せなかつたが、今の俺は金持ち！ つまり勝ち組！ こんな高い奴もポンポンと注文できるんだぜ！ ふははは！ ひれ伏せ愚民ども！

「ただいまなら期間限定でこちらのセットがお安くなつておりますが、いかがでしょうか」

「じゃあそれで」

俺即答。超即答。どんなに金持ちでもしょせん俺は俺だった。
ぐすん。

「はい、承りました。以上でよろしいですか？」

すいせんもうひとつだけ

才悟さん また何か食べるんですか？」

「ふふふ、違うよ真奈美さん。実を言うとね、これは最近友達に教えてもらつたんだが、会計の最後にこのファーストフード店でのみ使える呪文を唱えて、あるポーズをすると1割引券がもらえるんだよー！」

111

「ごつつ胡散臭そうな目で見られました。

「あ、信じてねえな。よーし見てうよー。俺の華麗なポーズを見ろ！」

最初に腕を胸の前でクロスする。続いて手を叩く。そして爽やかな笑顔でばんざいして呪文を発する！！

「らんらんるー！」

ザ・ワールド！～そして時は止まる～

。 。

。 。

。 。

「以上でよろしいですか？ お客様」

「……あー、はい。それだけで」

もうえたのはスマイル〇円と変人の名前だけでした。 いつそ殺してくれ。

「あの野郎……！ 今度会つたら骨も残さず灰にしてやる……！」

嘘八百を並べやがつた友人に呪詛を吐き続ける俺。しかもそれに夢中になつてゐるおかげでいつの間にやら真奈美さんはバーガーを食い終えて俺の妄想は虚空の彼方へと飛び去つてしまい、ますます恨みつらみを吐きまくる。もう… 犯罪おかしてもいいよね…？

「ううう……ボタンがいっぱいあつて何が何やら……。ええと、アドレス帳…？ 登録…？ ペア機能…？ ザ、ぜんぜん分かりません……」

食事を終えた真奈美さんは取説を片手に携帯電話という文明の利器に立ち向かっていた。苦手と言ひながらもやる気はあるようだ。結果はダメダメだけど。致命的なまでの機械音痴にいきなり携帯は荷が重すぎたかな。

「真奈美さん、細々とした機能は今はいいから、まずは通話とメールだけ使えるようになります」

「わ、分かりました」

それでは、説明書に代わつまして才悟がお送りします。

とりあえず、俺のアドレスと番号を送つて、それを素に実際にやつてみることにした。しかし俺は真奈美さんの潜在能力を悔つていた。なんと一番簡単なはずの通話の仕方を覚えるだけで1時間かかつたのである。ペアルックにしたいなんて我を通さずに真奈美さんのだけかんたん携帯にしとけばよかつたと心底後悔した。

続けてメール講座に移つたのだが、一通り手順等を教えた時点ですでに真奈美さんがダウン。テーブルに突つ伏して動かなくなつた。ふすふすと煙が出ている。あ、なんかぶるぶる震えだした。

「う、怖い。携帯電話怖い。番号が、ボタンが、アドレスが……あああああ

……えりやりアカウトを作り出しちしまつたりじ。携帯、恐ろしこト。

「う、とつあえず今日はいじまでにじとじつか。あとはゆくくり休むわ」

とはいえ、そろそろ店員さんの目が鋭くなつてきたので、もうあまり居座つてられないけど。

……

……

……

「……あの、才悟さん。ひとつ、聞いてもいいでしょうか」

数分間黙つて氣力回復に努めていた真奈美さんが、不意に顔を上げて改まつたように言つた。

「うん？ まあ、いいけど」

「では伺いますが、その……才悟さん、怒つていらっしゃいますか？」

「ん？ 何に対しても？」

「いきなり朝霧家へと連れてこられて、気がついたら養子になつていた、ということについてです」

「……ああ、それね」

俺は少なからず驚きを感じていた。

問い合わせの内容に関してもそうだが、田の前にいる真奈美さんの、その瞳。いつも變へるしその目が俺に『真剣』を叩きつけてくる、その事実。

俺はもう一度真奈美さんが言つた言葉を反芻する。

いきなりの真面目な質問。今更感のある話題。

本来なら真っ先に尋ねられてもおかしくないのに、今までまったく触れられなかつた話。

どうして今になつてそんな話をする気になつたのか。

……答えは簡単。彼女がメイドだから。

思い返すと、いつして真奈美さんが俺に対して突っ込んだ質問をするのは初めてのことだった。まあ当然だろ。メイドが必要以上に主人に対して踏み込むことがあまりよろしくないことぐらいは俺にも想像できる。だが、俺は真奈美さんに対してそういう遠慮はなしにしてくれと言った。だからだろ、今その話をするのは。もしかしたら、彼女は俺が朝霧家の養子になつたその時から、俺にその質問をぶつけたかったのかもしれない。そして今日この日になつて、ようやく俺に胸のもやもやをぶちまけた。

それは、つまり。

俺に対して、信頼を寄せてくれたということだろ。

なら、俺としても本音で答えないと。

嘘偽りない、俺の気持ちで。

まあ、ちょっとぐらりシリアルスになるや、俺だつて。

「真奈美さんは、俺が怒つてゐるよつて見えるる？」

「あ、いえ……。でも、今回のことはどう考へても急すきの話でしたから。わたくし達も才悟さんの養子縁組の話を聞かされたのはほんの数日前の話でして、すぐく戸惑いました。わたくし達でさえ戸惑つたのですから、才悟さんの場合ほとと深刻だったと思います」

「まあね」

突然の拉致。朝霧嚴重朗との邂逅。借金返済の日処。秋坂才悟の終わり。朝霧才悟の始まり。一変した生活。

どれも衝撃的ですぐには納得できない内容だ。

「わたくしにも……少し分かるんです。振つて湧いた理不尽な話に振り回されて、成り行きで流されて自分という存在を変えられて、過去の自分が消えていく現実　わたくしなら、怒ります。いえ、怒るというより、悲観します。なんで自分がこんな目に付て」

「そつか

俺は俺が出会つ前の真奈美さんを知らない。

俺が知つてゐる真奈美さんは、俺とそつ歳の変わらない女の子で、メイドで、ドジだけど一生懸命で、からかうと面白くて、美人で、日本刀を持つてて、笛を吹いたらすぐにやつてきて……俺は、そんな真奈美さんしか知らない。

彼女が過去に何を体験し、何を思つたのか、そんなもの俺は欠片も知らない。

今、その真剣な表情の裏で、彼女はどんなことを考えながら、俺に向き合つてゐるのだろうか。

「うーん、今回のことは、そうだな……まあ、怒つてはないかな。うん、怒つてはないよ。鬱陶しいとは思つたけど」

「やつですか

「うん、うう。前にも言ったと思うけど、俺は基本的に人を頼るつてのが好きじゃない。孤高主義つてわけじゃないけど、自分に出来る範囲でのことなら自分ひとりでやりきりたいと思う。そこへ飛んできたおいしい話。借金にも片がつくし悠々自適の生活送れるし至れり尽くせりだ。それが気に入らない。

俺は他人に与えられた幸せなんて興味ない。幸せってのは自分自身の手で掴みとるもんだ。こんなあつさり手に入った幸福なんて、正直言えば迷惑だ。俺は堕落した人生を送るつもりはさらしない

「…………それじゃあ、オ悟さん一人でもなんとかなる”日常生活の世話”をするわたくしも、迷惑ですか…………？」

俺は正直に告げる。

「うん、迷惑

」「

「好きだけどね」

「え……」

「最初はどうちかと言つと好かなかつた。俺がやるべきことをなんであんたがしてんだよつて。でもさ、なんていうか、真奈美さんに世話されてると、『ああ、この子は俺のために一生懸命になつてくれてるんだなあ』つて、逆に感動してきちゃつてさ。

真奈美さんつて、俺の世話することを”義務”として考えてないんじゃないかな。ただひたすらに俺のためを思つて行動してくれてる。だから俺は君のことが気に入つた。俺は他人の助力が嫌いだけど、善意で親切にされるのを嫌うほどひねくれてないよ

「えっと……あの、それってつまり……」

「よーするに、真奈美さんは特別だつてことだよ。情が移つたつてのもあるけどね」

照れたのか、真奈美さんは顔を赤くして俯いた。かわいいな、と俺は素直に思えた。

ふと思いついて俺は言つてみた。

「真奈美さんつていつまで朝霧家で働くつもりなの？」

「はい？ えっと、解雇を言い渡されない限りは、ずっと働かせてもらいつもりですけど……」

「そつか。じゃあせ」「じつ恥ずかしいなあと想いながら、思い切つて言つてみた。

「将来、俺が自力で稼ぎを出せるようになつたら、俺に雇われてよ。そんで、本当の意味で俺に、ずっと仕えて欲しいな」

「…………」

今以上の高給を出せるか自信ないけどね、と俺は付け加える。

「あ……えと……その……」

さつき以上に顔を真っ赤にした真奈美さんはあたふたと慌てたが、

次第に俯き、思わずドキッとするぐらいこの笑顔で、

「はい」

頷いてくれた。

「ふう、こんなもんかな」

空のダンボールを折りたたんで部屋の隅に置き、ようやく俺は一
心地ついた。

「うーん、やはりシユールだな」

買い物を終えて屋敷に帰り、晩飯を食つた後にそつそく調度品を
並べたのだが、前の俺の部屋の構図と似たよつに配置したために部
屋の中にもうひとつ部屋が出来た風に見える。しかも大半のものが
中古で安売りしてたものとかだから元の部屋の豪奢と対比してすん
ごい異質な空間を作り出している。

「まあ、これもおもしろいつかやおもしろいか

なにはともあれ俺の部屋が完成した。ちょっと奮發してパソコンなんかも買っちゃったし（しかも最新機種ですよ奥様！ ゼロの波にも負けずがんばりました！）、これからは時間が空いても暇になるつてことはないだろ？ ふふふ、待ってるよHDD、これから貴様の中身を桃色画像で染め上げてやるぜ！

「とはいって、ネット環境が整うのはもう少し時間がかかるしな……ふあ～。今日はもう寝ちまうか」

欠伸をひとつかましてふかふかベッドにダイブ。そのままの太くん並の寝つきのよさを發揮しようとしたのだが、意識が落ちる寸前で携帯のランプに気がついた。

「ん……メール？」

見知らぬメールアドレスだった。よつて差出人不明。訝しく思いながらも、とりあえず俺はそれを開いて見た。

『イツモアナタノソバー』

その晩、不吉なメールが気になつて一睡もできない俺だつた……。

今朝になつて知つたのだが、アレはビデオやら末だに携帯に不慣れな真奈美さんがそれでもがんばつて打つて送つたものなのだとか。カタ力ナジャなくひらがな、せめて件名欄に真奈美さんの名前があればいい話で終わつたはずの残念な結末である。

P
S
.

「ごめんなさいすいませんでした謝りますだからそれだけはやめて
お願いします猫耳スクール水着ランドセルだけは才悟さん才悟様や
めてーツツツツ！！！」

とあるメイドのトラウマ記憶より抜粋

第4話・サイドはうわしくなると、つい、ヤツちやうんだ（後書き）

なんだかほんдинション高いまままで突き進んだ今回のお話。めつちゃ書きやすかった。アドレナリン出まくっていますよ。やっぱり才悟は書いて楽しいです。

今回は天然ドジツ娘メイドであるまなみんにスポットを当てたわけですが、魅力が伝わりましたかね。やっぱりこういうかわいさは絵がないとなかなか分からなかな？ 作者脳内での額きシーンはかなりMP高いんですけど。（ちなみにマジックポイントではありますせん）

次の話はツンデレ義妹であるれいぴょんにスポットが当たることになります。彼女のツンツン具合にMの方は存分に悶えてください。じゃーーーこらでプロフィールいってみようか。

雨宮真奈美

本作のメインヒロインの一人。頭もいいし運動能力も高いがたまに致命的なまでのドジツ娘属性を發揮する。しかしそれさえも魅力のひとつに還元してしまうほどの容姿で、しかも巨乳、メイド、ボイ

ンの属性も宿している（大事なことなので二回言いました）。

他にも壊滅的なまでの機械音痴であるという面もある。いつでも他人を気遣える優しさを持つが、怒ると日本刀を取り出すので要注意。用法用量を守つてただしくいたずらしましょ。

特技はお茶淹れ（紅茶・コーヒーなんでもOK）。趣味は織物。座右の銘は「一日一善」

——チエファンの人、ごめんなさい。

ある田の畠下がり。

「ねえレイピょんレイピょん」

「誰がレイピょんよー 駐れ駻れしき呼ばないでよー。」

「じりじりレイピょんはひんぬーなんだい?」

「死になれー」

「」よーん

ハンマーの洗礼を食らいました。

ある田の朝食。

「おはようござれこまか、お父様。……つこでひびき田中

「はは、真奈美さんひびきだつてよ」

「ええー? わたくしですかー?」

「違うわよー まつたく朝からむかつくわねえ！ 修司！ 牛乳を
もつー杯用意してー！」

「はい、お嬢様」

「ねえレイピヨンレイピヨン」

「レイピヨン言つなかつー。」

「じつしてレイピヨンはそんな無駄な努力をするんだい？」

「弾け飛びなれー」

「によーん」

惚れ惚れするぐりーの直撃コースで俺の目ん玉に向けてフォークが飛んできた。マジビビッた。真奈美さんが受け止めてくれなかつたら俺死んでた。

ある日のティータイム。

「……修司。なんで私がこんな視界に入れるだけで吐き気がするよ
うな奴と一緒にお茶しないといけないの？」

「はは、真奈美さん見ると吐き気がするつてよ」

「ええー？ またわたくしですかー？」

「違つて言つていいでしょ？」「それで真奈美はやつて、」

「…」

「しゅん…」

「お嬢様、才悟様はあなたの兄君です。それなのに、お一人がお顔を合わせるのは食事のときを除けばたまに廊下ですれ違う程度ではありませんか。それではあまりに寂しそぎます。ですから真奈美さんと相談した結果、これからは定期の度に一緒にお茶をすることにしたのです」

「真奈美…（ギロツ）」

「す、すこません麗菜様！　出しゃばった真似をしてしまって…」

「……ふん、まあいいわ。真奈美の淹れるお茶はおいしいから、特別に許してあげる。要はこの『』を視界に入れなければいいだけよ」

「ねえレイピヨンレイピヨン」

「…………（無視）」

「俺のパンツ履いた感想どうだった？」

「ふーっ…」

「お、お嬢様！　飲み物を吹くなんてなんてはしたない……私は恥ずかしいです」

「げほげほっ。修司つ、指摘するのはやじじゃないでしょ？…？」

「れ、麗菜様……まさか、麗菜様にそんな趣味があつたなんて……」

「ちーがーうー！ 指摘する箇所はあつてるけど想像するのも身の毛がよだつ誤解が生じてるわよ！ なんで私がこんな奴のば、ぱぱぱぱパンツなんて履かなきやいけないのよっ！」

「またまたー。どうせ履く前にくくんくん匂い嗅いでたんだろー？ 隠すなよー」

「神に祈りを捧げなさい」

「にょろーん」

首筋に注がれた紅茶は、とてもお熱ついざになりました。

とまあ、俺達兄妹の毎日は、大体こんな感じ。
父さん、母さん……ぼく、近々そつちに遊びにいくかもしないよ……。

あ、天の声が

『だが断る』

そつすか。

「妹つて、人類の宝だよね」

「は、はい？」

唐突な俺の言葉に、ホワイトボードに文字を書き込んでいた真奈美さんはきょとんとした表情で振り向いた。

「真奈美さん、俺はね、実は結構妹つて奴に憧れてたんだよ。ほら、俺って元々一人っ子じゃん？ 親父達も仕事でしおりちゅう家空けてたから、昼間はともかく夜はひとりで遊ばざるを得なかつたわけだよ。そんな時に俺は夢想するのさ。かわいい妹が俺の後ろにずっとひつついて、『お兄ちゃん待つてよ～、置いてかないで～』とか『お兄ちゃんあの犬さん怖いよ～』とか『お兄ちゃんつ、遊んで遊んでっ』とか『お兄ちゃん、お兄ちゃん、わたし大きくなつたらお兄ちゃんのお嫁さんになるつ。約束だよつ』とか言つちゃつてうふふふふふふふ！」

……あれ？ なんで真奈美さんそんな離れたところにいるの？

「お、お氣になさりず。」。で、でも、なんでわざわざそんなこと授

「授業中に喧嘩ですか？」

「授業中だからこそ、だよ。俺はね、こうした授業中でも、真奈美さんとのお喋りを楽しみたいんだよ。教師生徒としての関係だけじゃなく、もっと友好的な関係を築きたいんだよ」

「あ、ありがとうございます。才悟さんにもまだ思っていただけで、わたくし、メイド冥利に尽きます！」

さすが真奈美さん。授業時間を潰したいがためについた即興感丸出しの言い訳になんの疑問も抱いていない。この人、振込み詐欺とかに遭つたらほいほい投資しそうだな。

「でも才悟さん、そこまで妹の存在に憧れていの、どうして麗菜様と喧嘩ばかりしてるんですか？」

「そこなんだよ真奈美さん。俺はね、あいつが俺の妹になると厳重朗さんから言われたときから、ずっと胸の内に秘めていた言葉があるんだよ」

「な、なんですか？」

「奴は、本物の妹キャラではないつーーー！」

断言した。宣言した。

「解説しよう！妹とは、ギリシャ神話に登場する伝説上の生き物である。実際には存在しないとさえ言われているが、希少なサンプルはデータ上に確かに存在しており、そんな存在に兄として慕われ

る人物は神に愛された男として聖人の名を欲しいままにすることができると言わっている！

妹の特徴としては、”見た目は大変可愛いく、兄にベッタリ、なんかみんな同じような声な気がする”という、さつき俺が言つたような工ア妹のような感じだ。以前は血が繋がつていながら妹と言っていたが、近年では『義妹？ そんなものは本物の妹ではない！ 妹とは、幼少の頃より片時も離れず過ごした真実の家族であり、一緒の部屋、一緒のご飯、一緒の部屋を持つ、幼馴染キヤラでさえ実現できない親密性を有する実妹こそがジャステイスなのだ！』と公言する男もいて、実妹でもなんら問題はないとされる。むしろ俺はこっちを推奨する！

ちなみに、政府が行つた全国的なアンケート『姉と妹、欲しいならどっち？』では、熟女その他にしか興味ねえとほざく奴らの意見を排除した結果、実に七割近くが妹と答えている。つまり！ 世の男性の半数以上がつ、伝説上の生き物である妹を欲しているということであるつ！ もし、『ある日突然12人の妹ができる、しかも全員が兄を慕つてくるという立場に立てる権利』というものがあるなら、その霸権を争つた世界規模の戦争が勃発するのは想像に難くないだろう、……！

「…………えつと、つまり、要約すると、才悟さんの言う妹はこの世には存在しない、と？」

「違うつ！ 現実世界にはいないだけだつ！ 本物の妹達はつ、常に俺達の心の奥で無邪気に笑つてつ、『お兄ちゃん』『お兄様』『おにいたん』『兄貴』『にいにい』と心穏やかになれる声音で呼ん

リアルワールド

でいるものなのだつた。そりだりつンウルブランザーフ……？」

ふりつ

「あれ？ 真奈美さんどうしたの？ 貧血？」

「い、いえ、ちょっと軽く眩暈がしただけです……」

「そう？ 体は大切にしてくれよ？ んで、なんで部屋の隅っこにいるわけ？」

「お、お気になさらずに。そ、そ、お部屋の隅っことか大好きなんですわたくし！」

「なんだそりや。変わつてゐなあ真奈美さん。あははは～」

笑う俺に真奈美さんは終始憐れむよつた視線を向けてきた。なんでだらうね？

「そ、それじゃあ才悟さん、才悟さんが麗菜様と喧嘩するのは、麗菜様が才悟さんの言つた”妹”ではないからですか？」

「うん？ まあ、その理由がないとは言わないけど……」

「才悟さん、それは少々わがままが過ぎます。この世には人の数ほど価値観があつてですね、その中のひとつである才悟さんの価値観を麗菜様に押し付けるのはさすがにどうかと思ひます」

べつにそれが大本の理由じやないんだけどな。まあいいけど。

「でもさあ真奈美さん、さすがにアレはないと思つんだよ俺は。まあ、俺だつてそれなりに現実は見てるし、現実世界の妹にそこまでは求めないよ。でもさ、”兄のことをお兄ちゃんと呼ぶ””兄のことを慕う”つていうそれぐらいのことは期待したつて罰は当たらぬだろ? それなのに蓋を開けてみれば、口も悪けりや性格も悪い。素直じゃねえし、何より胸がない。落胆してちょっとキツく当たるのもしようがないってもんだろ?」

「最後のは妹がどうではなく才悟さんの個人的趣味だと思つんですねが……」

そこにはほら、俺つておっぱい星人だし。

「……才悟さん。確かにあなたの言う通り、麗菜様は口も少々悪いかもしぬませんし、兄であるあなたを敬うことはしていませんが、それは才悟さんだつて同じなんですよ?」

わたくしは伊達さんと違つて生まれた頃より麗菜様のことを存じているわけではありませんが、麗菜様は本當はとてもお優しい方なのです。ですから、いがみ合うことから始めるのではなく、まずは麗菜様を妹として接してあげてください。わたくしはお一人が仲良くなしておられるのが一番嬉しいです」

「ふーむ。まあ、努力はしてみるよ

妹として、ねえ……。

「失礼、少しお邪魔するよ」

「お？ 厳重朗さん？」

珍しい人が俺の部屋に現れた。この人が直接この部屋に来るなんて初めてじゃないだろうか。

「どうしたんですか、こんな朝っぱらから。この時間帯なら仕事に出かけてるはずじゃ？」

厳重朗さんは朝霧グループ当主という地位を裏切らないほど多忙だ。一応朝と夜の食事には顔を出だが、それ以外は大抵仕事で外出しているか書斎で書類と格闘しているかだ。いつかは俺があんな立場に立つかもしれないと想像するとそれだけで鳥肌が立つ。

「ああ、その仕事のことなんだけじね。すまないが、真奈美くんを今日一日借りてもいいかね？ どうも今日の仕事は私一人では力バ一しきれなくなりそうでね、彼女の力が必要なんだ」

「はあ。まあ、元々の雇い主は厳重朗さんなんですから、俺がどうこう言つ権利はありませんけど、構わないつすよ。真奈美さんもいいよな？」

「は、はいもちろんつ！ お供させていただきます、旦那様」

「ありがとうございます。修司くんに頼んでも良かつたんだが、あいにくと今は出かけていてね。本当に助かる。ああそつだ、誰か代わりのメイドを寄こすよに」

「

「あ、べつにいいですよ」

「そうかい？」

「はい。俺のメイドは、真奈美さんだけっすから。他はいらないです」

「~~~~~」

「はは、そうか」

厳重朗さんは爽やかに笑うと、顔の赤い真奈美さんを連れて退出した。かくいう俺も少し顔が熱い。こつ恥ずかしー。

「しかし、真奈美さんがいないとなると授業も中止。一気に暇になつちまつたなー」

いつかと似たような状況になつたが、今の俺にはそれなりに娯楽物があるから退屈はしないか。あー、でもなんかそんな気分でもないなあ。さつきの真奈美さんとの会話のせいでちょっと胸がもやもやしてる。

妹、いもうと、イモウト……。

「……気晴らしに街に遊びにいくか」

誰もお供がいないが、またまにはひとりもいいだらう。むしろそつちの方が気が楽だし。

「あ、でもよく考えたらあの街つて真奈美さんとの買い物を除けば行つたことないしなあ。あの時は真奈美さんの案内があつたからよかつたけど、ひとりで大丈夫かな?」

うーん。ま、俺は別段方向音痴つてわけじゃないし、大丈夫か。

「やつほー。完全に迷うてしも'つたぜー」

すんません嘘ついてました。ホントは見知らぬ土地にいくと速攻迷子になっちゃうような子なんですぼく。ちなみに結構余裕つぽそくに見えるが、口調の不自然さからも伺えるように内心は結構焦つてます。

「まあいな……どうやつて帰ろつ……」

タクシーでも使おうか。この前厳重朗さんにもらつた資金がある

クレジットカード

し。

でも俺、よく考えたらカードの使い方知らない……。

そこひー。事実でも俺を貧乏人扱いするなつ！ 手元に現物があつたほうが安心するんだから仕方ないだろ！？（ちなみにこの前の買い物の会計はすべて真奈美さん任せでした）

あ、真奈美さんで思い出した。そう言えばちょっと前に、もし外に出るならつて、真奈美さんが小金が入った財布を渡してくれたつ。どれどれ。

「〇一二。」

中身見て速攻閉じた。

ちよつとちよつと！ 諭吉さん十数人は俺のキヤパシティを軽く超えてるよ真奈美さん！ ほんの小金だつて言つたのに、あれは嘘か！

やべえ、鼻血出そう。で、でもなんだらう？ 一度見てしまつと、もう一度見てしまいたくなる不思議な魔力が……。

開けて。

閉めて。

開けて。

閉めて。

開けて……

「ママー。おのお兄ちゃん変なことじつへるー

「しつ！ 見ちやうけません！」

HAHAHAHA!
泣いてなんかねーよチクショー!

「くそううーー！ なつたらホントに変な！」としてやるよー。選択肢力モンチー！」

- 1・下半身を露出させて街を徘徊する
 - 2・んま、つあ、ちょぎー？（コンドームを天に差し出して）
 - 3・全裸で考える人・才悟
 - 4・純真無垢そうな子供にエロ本をあげる

「待てい！！ 人生を捨てる気か俺は！？ しかも全部下ネタなんて最高の紳士だなこの野郎！！ 特に最後なんて人として終わつてるぜヒヤツホーツ！！」

「すいませんでした。もう一度としません。失礼します。……ほひ。危うく前科者になつちまつといふだつたぜ」

「うーむ。

「……はつちやけた割には、あんまし気分は晴れなかつたな」

「いつもはこれぐらいバカやればもやもやなんて吹つ飛ぶんだがなー。」

「ちょっと真剣に考えすぎてるのかな。俺らしくねえ」

ホント、俺らしくねえ。

あの家に厄介になつてからといつもの、振り回されてばかりだ。それがいいことなのか、悪いことなのか、そこはよく分からぬけど。

「……ん?」

一瞬視界に見知った人物が映つて思考が止まつた。あれは……修司さんか?

「修司さん」

「あ、これは才悟様。どうも。お賣い物ですか? ……おや? 雨宮さんの姿が見えませんが……」

「ああ、人手が足りないつて厳重朗さんが連れてつたよ。修司さんこそどうしたんだ? 朝から出かけてるつて厳重朗さんに聞いたけど」

「えつ? え、ええとですね、私は……」

「修司修司つ！」

ん?
聞き覚えのある声が修司さんの後ろから……

「ビッグーノースよ修司つ。ずっと探していたベルちゃんの限定ぬいぐるみがこのお店に置いてあるんですってつ！ ああもうなんて幸せなのかしらー。修司つ、特別に言い値で払つて……！」

ピシリ、と、俺の顔を見た口り娘は全身を硬直させた。

- 1 -

沈默

俺は何度かぬいぐるみがたくさん置いてある店と口をパクパクさせた口り娘を見比べた後、真っ白になつた頭で思わず本音を言つた。

「結構かわいい趣味してるな、麗菜」

— ۱۱۱ —

おや?
雲もないのに頭上に影が……

10tハンマーが、すぐ目の前にありました。

!

?

泣

「才悟様！」

はっ！
一瞬意識飛んでた！

「うおっ！？」目の前でハンマーが止まってる！？」

見ると、修司さんが俺に当たる寸前で振り下ろされる麗菜の手を止めてくれたらしい。さすがは修司さん。

一才悟様！？ 大丈夫ですか、お怪我は！？」

「アーティスト」=「アーティスティック」=「アーティスティック」

足が高速でふるふる震えてるのは仕様です

離しなさい修司つ！こ、こんな醜態をこんな奴に見られて……！もう私が死ぬかこの変態が死ぬしか道は残されてないのよ！」

「なんだよそのめちやくちやな論理展開！？ いいじやねーかぬい
ぐるみ見てほくほく間抜け顔をさらしてんのを見たぐらい！ なか
なかポイントは高かつたことよー！？」

「言うなバカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！」

いやホント、自分でも何言つてるか分かんねえつす。麗菜とぬいぐるみのセットはそれぐらい衝撃的だつた。

ちなみに、暴走した麗菜が鎮圧したのは、それから10分後のことだった。

「なんか、今でも生きた心地とかしないんですけど……」

「殺されなかつただけマシだと思ひなさい！」

「お嬢様、抑えて抑えて」

「今日見たことはぜーつつたにに他言無用よ！　いいわね！　バラしたらあんたの戸籍が消滅するわよー！」

「これだよまつたく。」

俺は精神力を、麗菜は体力を急激に消耗したので、ちょっと早めの昼食ということで、俺達は近くのファミレスに入ることになった。前回真奈美さんをファーストフード店へ連れて行って嫌な顔をされたので改善したのだが、それでも麗菜は文句たらたらだった。修司

さんですら苦笑してた。すまん、これ以上高い店は疲弊した今の俺ではとてもじゃないが耐えられないんだ。

「しかし、口も汚ければ性格も悪い、ハンマーは振り回すし、おまけに胸がない麗菜お嬢様が、市販で売つてゐるようなぬいぐるみに興味津々とはな。世界が震撼したよ」

即座にハンマーを取り出して殴りかかろうとした麗菜だが、あらかじめ目を光らせていた修司さんの手によつて阻止される。代わりにキッと俺に睨みをくれた。

「ひるねさいわねつ！ あ、あれはたまたま……そう！ たまたまなんの興味もないお店に入つたら、哀愁を誘う瞳で私を見つめるベルちゃんがいて、このまま見捨てては朝霧麗菜の名に傷がつくと思つて私はベルちゃんを保護しようとしたのよつ！ それだけなんだからつ！」

なんて矛盾だらけな言い訳なんだつ。呆れるどじろか感心してしまつた。

そういうや、よくよく思い返してみれば、前に一度こいつの部屋に偶然入つたとき、視界の隅にぬいぐるみらしきものがあつたような気がしないでもない。あの時はあまりなつふふイベントのせいでそこまで気が回つてなかつた。

「……つてー 今さり気なく聞き捨てならない言葉があつたわよつ！ 脳は関係ないでしょ脳はあーー！」

「何言つてんだ、胸が一番重要だろ胸が。この世はボインが正義なんだよ」

「才悟様、さすがにその持論は敵をお作りになるかと……」

「分かつてゐよ、冗談[冗談]

「半分本気だつたけど。

「まつたく！ そもそも、一体全体なんで私が秋坂才悟なんかと席を同じくして昼食を食べないといけないの？ 知つてゐるわよ私。お金のない庶民はレストランなんかの残飯を食べて生活しているんでしょう？ あなたもそこら辺の『ミニ箱』をあさつてくれればいいのよ」

「お前は庶民に対する激しい誤解をしてこる」

……いやまあ、したことはあるけど、残飯あさり。

「あのなあ麗菜。今はまだお前は幼いからいいかもしない。でも成長したらお前だって社会の上に立つ人間になるんだ。上に立てば当然下の人間を動かす必要がある。今の内に下の世界のことを勉強しどいた方が将来役に立つぞ」

「子供扱いしないで！ あんたなんかに言われなくともそれくらい分かつてゐるわよ！」

「そんなペッたん胸で言われても説得力ないな」

「うぬうやこつて！」

「うやうやこつて……」

「歯んだるみ……悪いつ……？」

「逆ギレかよ……。」

「~~~~~っ！ 修司、少し席外すからその内にこのわにせつ人間を排除しておきなセコッ！」

「ゼン行くんだよ。トイレか？」

「直つなあー……。」

ふりふりしながら麗菜はトイレに入つていった。せめて注文決めてから行けよ。

「ん？ 修司さん、なんで笑つてんの？」

「いえ、お一人とも、ずいぶん仲がよろしくと思いまして」

真奈美さんと正反対なことを言い出した。

「修司さん、気は確かか？ 今のやつ取りのどこを見たらそんな感想になるんだよ」

「ただ笑い合えば仲がいい、というわけではないと私は思つてあります」

「喧嘩するほど仲がいって言いたいの？ そんなんじゃなこよ。俺は単に、ああいう態度しか取れないんだよ」

「ゼンこいつですか？」

「俺、妹つて奴が分かんねえんだ」

修司さんはキヨトンとした顔を見せた。

「分からぬ、とは？」

「ああ、もちろん言葉の意味は分かつてゐるよ。家族の中でどういう位置づけかっていうのも理解してゐる。でもさ、俺はそもそも家族つて奴が分からぬ」

「そんな……才悟様には、ちやんとしたじ両親がいたのでしょうか。それなのに何故……」

「そりなんだけどさあ……家つて昔から貧乏だつたから、親父もお袋も共働きで、まだ物心がつくつかないかつて年でもひとりでお留守番なんてザラでさ、何日もひとりつてこともあつたんだよ。そんなわけで、俺は世間一般の家族の触れ合ひつて奴が致命的なまでに欠けてるんだ。

だからつて、親父達を親と思つてないつてわけじゃないんだ。ただ触れ合い方がよく分からぬ。氣まずい雰囲気になつたことはないけど、それが世間で言つところの親子としての触れ合いなのか自分でも自信がないんだ。妹なんてなおさらだよ。どんな風に接すればいいのか、分かりやしない。だからあんな態度しか取れないんだ

よ

「才悟様……」

「ホント、妹つてなんなんだろな」

知識としては知っている。

ドラマや漫画なんかで妹キャラなんてしようぢゅう見かける。でもそれは架空のお話。実際に妹のいる友達が言う妹とはなんか違う。分からぬ。未知の領域だ。そんな奴に、一体どんな態度で接すればいいっていうんだ？ 僕は一体何をすべきなんだよ？

俺は、あいつの兄貴になれるのか？

「不器用、なんですね、才悟様は」

「そうかもね」

修司さんは思案顔になつた。

「才悟様。ひとつ、頼みごとをしてもよろしくでしようか？」

「頼み？ いいけど」

「今日一日、麗菜お嬢様のことがあなたに一任してもよろしくですか？」

「は？」

「俺が？ 麗菜を？」

「……今ままだと、麗菜を怒らせてばっかりになると思つナビ？」

「大丈夫ですよ。才悟様は、お嬢様に歩み寄つひとつ氣持ちはあるのでしょうか？」

「まあ、一応。突然の養子縁組の話とはいって、書類上は長男つてことになつたんだからや、出来るだけいい兄貴になつてやがつと思わなくはないよ」

「なら心配はありません。あまり深く考えず、今まで通り振る舞つていれば、それでいいんだと思います。ただ、ひとつだけ常に胸に留めておいてください」

お嬢様は、あなたより年下の、かわいらしこじらのある女子なんですよ

修司さんは一礼すると、俺の制止を聞かずに店から出て行つた。

「面倒なことになつたなあ」

ホントに大丈夫なんだろうな、修司さん。

しづらひにして、麗菜がトイレから戻ってきた。

「……なんであんたがまだここにいるのよ」

「こちや悪いか

「悪いわよ。まつたぐ、修司は向をじてゐのかしづらー。」

「修司さんなら職務放棄して先帰つたが」

「はあつー？ ひよ、嘘でしょー？」

「マジ。なんかお前のことを任せられた」

「……ロロス」

「おや？ なんだか背筋が震えちゃつたぞ？」

「わつこ。帰る」

溜息をついた麗菜はぐるりと踵を返しやがった。だが、面倒なこととはいえ、これから一緒に暮らしていく以上はそれなりの関係を築きたいと思つ（ちょっと癪だが）ので、ここで引き下がるわけにはいかない。

「おこおこせりやないだろ。せつかく街に出てきたんだから、もつと楽しんでから帰りつが」

「異臭がするから近寄らないで」

「異臭つてなんだよ！？ 風呂には毎日入つてる！」

「こくら洗い流しても貧乏臭さは抜けきつてないわよ。大体服装からして貧乏臭いわ。何よその気品の欠片もない安っぽい服は！」

「テメヒヨー 口を舐めんじゃねえつーー！」

「仕方ないだろー！ 屋敷から支給された普段着は上品過ぎて着るのが勿体無いんだよ！」

「一か八、よく考えたら、俺がこいつの兄貴になる努力をしようと、こいつが俺を嫌つてるんだつたら意味がないような気がするんだけど。まあ、どっちかが歩み寄らなきや始まらないってことは分かるんだけどさ。納得いかねー。」

「とまあ、もうメニューも注文しちまつたんだから、帰るなあせめて食つてからにしろ」

「待ちなさいよー 私は頼んだ覚えないわよー？」

「お前の分も俺が頼んどいた」

「何を勝手に」

「まあまあ、お前なら絶対氣に入る奴だから」

「なんて話してると、グッドタイミングで店員さんが料理を運んできた。

「お、うまいー」

俺が頼んだのはハンバーグセット。鉄板で焼ける音と匂いが俺の胃を刺激する。さっそく俺は一口。はふはふ。うまい。

「……秋坂才悟、どうこういふことは、これ

「んー、どうしたー？」
冷めない内にお前も食えよー」

「食えるかバカ！」
「一体なんなのよこれ！？」

「え、知らねえの？ これはな、特製お子様ランチって言うんだぞ。オムライスに刺さった旗がチャーミングだろ？」

ちなみにいうと俺が子供の頃の誕生日と言えばこれだつた。今思
い返すと、なんて安い誕生日プレゼントだつたのだろうか。値段も
知らずにはしゃいでいたのが懐かしい。

「お子様ランチイーーー！？ それって子供が食べるるものじゃない！ あんたどこまで私をバカにすれば気が済むのよ！ 」 そんなもの食べないわよ私！」

「このお子様ランチはそんなバカにしたものでもないぜ。量は少ないけど味はなかなかだ。それに、ぜんぶ食べなきゃ付属のねむりやがもらえないぞ」

「バカにして！」の私がおもちゃなんかに釣られるとなつ！」

ピシャー、と電撃が走ったかのように衝撃を受ける麗菜。

「…これつ、ベルちゃん人形！？」

「ああ、そんな名前だつたつけか。確か、このファミレスつてそのキャラクターのグッズ作つてる会社と同じ系列で、よく試作品がおまけについてくるんだよ。俺も昔はおまけ集めてたなあ」

今とは違うキャラクターだつたけどな。

「で？ どうする？ お子様ランチ全部平らげるようなよい子じゃないとそのおまけはもらえませんよー……つてもう食い始めてやがる！？」

すげえ、人形見た瞬間態度を翻しやがつた。すごい勢いでランチが消えていく。

「『』馳走様！」

「はやつー！」

かかつた時間わずか3分。カップ麺もびっくりの早さだ。

「秋坂才悟つー！」

「な、何だよ！」

「これつ、この人形つ、バリエーションはいくつあるのー？」

「え、えーと確か、4種+シークレット1種だつたかな」

「ちょっとそこの人だつ！ 特製お子様ランチ5人前持つて来てつ！ 大至急つ！」

「か、かじこまつました」

「「つおおいー?」

「じつ、まさかたつた一回の来店で全種コンプリートする気か!
? マニアつてレベルじゃねーぞ!!

「お待たせしましたー。特製お子様ランチで」

店員さんが言い切る前に既に麗菜はフォークを手にしていた。
瞬の油断が命取り そんな狩人の瞳をぎらつかせ、皿がテーブル
に置かれた瞬間にはワインナーが一個消えていた。あるえー。

「……やべえ。ちょっと予想GISO過ぎてボケもツツ」「///もできね
え」

俺はしばらく呆れながら麗菜を見ていたが なんつーか、次
第に頬が緩んでいくのを抑えられなくなつていった。

「はぐつ、んぐつ、あいしげー、あいしげー」

まるで小さな子供のようにフォークを握つておいしそうにランチ
を食べる麗菜。不覚にも、かわいいと思つてしまつた。胸の奥がぽ
わぽわと暖かくなつて、とても優しい気持ちになつてくる。

「おに麗菜。ほっぺにじる飯粒ついてるわ

「ベルちゃんつ、ベルちゃんつ、ベルちゃんつ

「聞こひやこねえ」

「しょうがないから」飯粒を取つてやると、

「ありがと」

などと素直に礼を言われて、なんだか俺の方が恥ずかしくなつて
きた。

なんだこれ。なんですかこれ。なーんなーんでーすかー。

「……ホント、振り回されてるなー俺」

それがいいことなのか、悪いことなのか、よくわからない。

でも、楽しいと感じている自分は、確かにいた。

「へやこ、あもい、臭い。もつと離れなきことよ」

店を出ての開口一番がそれでした。

「うう、うう……。バカだつた……ちょっとといい雰囲気だなーとか思つた俺がバカだつた……」

「何泣いてんの？ あも……」

「うん、『めんね、きもくって。生まれてきてすこませんですよね。えぐえぐ』

「わう、『レたあとのシンがこじまぐれ辛いとは思わなかつたよ……』。

しかし、やはり機嫌はいい方なのか、麗菜は戦利品を抱えて一いつ口じてこる。笑つてれば普通にかわいんだけどな。

「それで？ これからどうへ行くの？」

「は？」

「何気の抜けた声出したのよ。これから街を回るさでしょ。わひととエスコートしなきこと

「…………こーのか？」

突然の心変わりにさすがに困惑。

「何よ、まあ、やつちがいんなうこんだけビビ」

「いや、まあ、やつちがいんなうこんだけビビ」

どうやらホントに機嫌いいらしい。

「ていうか、俺がエスコートするのかよ」

「だつて私、午後の予定なんて特に考えてなかつたもの。それに、貧乏庶民のあなたがどんなエスコートをするか興味あるわ」

「いきなりそんなこと言われてもな……」

そもそも俺はこここの地理に疎いからエスコートもクソもないんだが。何より、彼女とデートしたことなんてないから女の子連れてどこ行つていいか分かんない。ち、違う出合いがなか（以下略）

まあ、友達と遊ぶ感覺でいいか。

つーわけでやつて來たゲーセン。

「……あんた、バカじゃないの？」

「うぐう」

「一体どんな所へ連れて行つてくれるのかと思つたら、こんなうるさくてタバコ臭いところに連れてきて。なに？ あんた私を怒らせたいわけ？ 死ねば？ いつ死んでみれば？」

初つ端から罵倒の嵐だった

「げ、ゲーセンをバカにするな。そもそもお前ゲーセンがなんたる

ものか知つてんのかよ?」

「ふん、それぐらじ知つてるわよ。」“デキロン”とかいう連中が口インをめぐつて血沸腾き肉踊る決闘を行つ「ロロセウム」でしょ?」

「ハメヒ庶民に喧嘩売つてんのか」

本当にこじつけ今までどんな教育を施されたのだらうか。今度修司さんを問い合わせよ?」

「しょうがない、俺がお前に庶民の遊びとこつもの教えてやる」

手始めてエアホッケーで対戦してみる」とこした。

「え、えつと、これで打てばいいんでしょ? 楽勝よ」

おずおずとパックを弾く麗菜。

「やあー!」

全力で弾き返す俺。パックは寸分違はずゴールに突き刺さった。

「はあー! な、何よ今のー! 卑怯よー!」

「おいおい初めにルールは説明しちだろ? このゲームは気を抜けば終わりなんだよ。まったくこれだから危機感のないお嬢様は……」

「かつちーん! 調子に乗つて……! 勝負はまだこれからよー!」

ええい！」

「ほこりと」

ト。力任せに打たれた計算も何もないパックを弾き返す。一点点目ゲッ

「ちよつとつ！ 私は素人なのよ！？ 少しは手加減しようとか思わないの！？」

「ほー。普段からあれだけ大言壯語してる麗菜様はその程度のハンデで勝負を諦めるのか」

「レーベン」

「はい、所詮はただのつるべただつたところ」とか

ふせん と音かした気がした

- 11 -

「えーい！」

何をとち狂つたか、麗菜はパックを手に取り空中スマッシュをかましやがつた。

しかも標的は我がイケメンフェイス（意味が重複してるのは仕様だよ）。

「ちょ、あぶねえ！？」お前マジで空中ホッケーすんなよ！？」

「何かわしへんのよー。ちやんと顔で弾き返しなさいよー。」

「言つてねーじがめひやくひやだー。」

俺達は偶然通りかかった店員さんに厳重注意をくらつた。当たり前だ。結局エアホッケーは断念することに。

「おーけー。さつきのは確かに俺も大人気なかつた。そもそも勝負形式を取つたのが間違いだつたんだ。ここは一人プレイを楽しもう」というわけでモグラ叩きをすることに。これなら簡単だから麗菜もキレイなだる。

手始めて俺がやつてみる。

「よつ、よつ、と。お、本日最高の点数だ」

「ちつ。マグレの癖に調子に乗つて」

「こつマジむかつくんだが。

「退きなさい。この朝霧麗菜があんたの記録を軽く超えてあげるわ

やれやれ、ヒジョースチャーブする俺。昔はゲーセン荒らしのオチやんと恐れられたこの俺の記録がそう簡単に塗り替えられるわけが

ガツシャーンッー！

「あれ？ これ動かなくなつたわよ？ 故障したんじゃないの？」
「……そりゃ皿壊の10才ハンマーで殴られたらモグラも引きこも
りたくなるわ」

「シッ！」 むのもバカラじくなるぐらにマシーンを粉碎してくれた麗
菜に溜息しか出ない。 またしても店員さんに厳重注意をくらつた。
青くなつた顔を見て本当に申し訳ない気持ちになりましたよ。

「おーけいおーけい。 僕がバカだつた。 そもそもお前に道具を扱う
ゲームをさせようとしたのが間違つたんだ。 お前は今後一切何
も使うな。 ハンマーも禁止」

「つーわけで道具を使わなくていい。 ○○○キャッチャーをやること
に。 予想通りぬいぐるみ達に囲まれて、 満悦の麗菜。 これなら暴動
も起きまー」

「わあー！ ねえっ、 これどうやってぬいぐるみ取るの？ 早く
教えなさいよ！」

ホンツットにこいつはぬいぐるみを前にすると人格が変わるらし
い。 なんとなくこいつの扱い方が分かつた気がする。

「それ、そりゃ。 …… つづく、 取れーなーーー！ これ取れな
いように細工されてるんじやないかしらー。 ちょっと秋坂才悟！
これなんでこんなに難し」

「ん？ 何か言つたか？」

ちよつと俺は4つ目の戦利品を取り出しているところだったのでもう聞こえなかつた。振り返ると、麗菜は俺の取つたぬいぐるみを見てピクピクとこめかみを痙攣させていた。あ、なんか嫌な予感。

「ひこやーつーーー なんで秋坂才悟にできて私にできひこやーいのよーつーーー」

「なぜ猫語ー?」

なんてシッコんでる隙に麗菜は奇声を上げながらボックスを力いっぷいゆすり始めた。全国のクレーンゲームが怒り狂いそうな所業である。もうやだーの子。

当然のことながら再三厳重注意をくらつた。といふか「もう帰つてくださいお願いします」と泣きつかれた。名も知れぬ店員にここまで申し訳ないと思ったのは人生初でした。

……

……

……

そんなわけで、店を追い出されてしまつた俺達。

……絶対怒つてるよなー、ここつ。

「ち、さて、次はどこへ行きましょうかおぜつせん?」

またハンマーが飛んでくるのかとびくしながら振り向くと、意外にも麗菜は沈んでいた。それも拗ねている類だ。

「何よ何よ……私は朝霧麗菜なのよ。なんでもできるんだから。初めてやることだって器用にこなしちゃうんだから。負けてないんだから……」

泣き言みた人に麗菜は恥ぐ。まるで迷子の子供のようだった。放つておいたら、すぐにでも泣き出してしまうやうな気がした。

ふと、修司さんの言葉がよみがえる。

お嬢様は、あなたより年下の、かわいらしいところのある女子なんですよ

「……ああ、はいはい。なるほどね」

少し。

少しだけだけど。

分かった気がするよ、修司さん。

「……はあ。しゃがねえなあ。ほり、俺が取ったぬごぐるみやるから元気出せ」

「えつ。い、いこのー!?」

「うそ、いい」

「わあーーー。」

これまでの消沈ぶりが嘘みたいにぬいぐるみを抱えてきやつ
やつとはしゃぐ麗菜。単純な奴だ なんて思つて見てたら、きつ
と睨みをくれた。くわばらくわばら、と口笛を吹いて誤魔化しなが
らそっぽを向く。

「 あ、ありがと……」

「え?」

啞然として振り向くと、既に麗菜は俺に背を向けていた。聞き間
違い……？ でも、なんか少し頬が赤くなつてゐるやつな……。

「あつ。じとなどこ新しくぬいぐるみショップができるのー。」

すつたかと走つていへ麗菜。……おなかなあ？ そんなはずない
よなあ？

「才悟様、早く追いかけないと置いていかれますよ」

「あ、修司さん」

二つの間にか後ろには修司さんが立つていた。

「おや、あまり驚いてくれませんね。……もしかして、氣づいてお
られましたか？」

「いや。頃かられるまで後ろに立つてゐる」という知らなかつた。でも、修司さんのことだから、なんだかんだ言つても麗菜から田は離さないだらうと思つてたから

「あはは、見事に見抜かれてしましましたね」

まあ、正直にいつとこきなつて声をかけられたのはまよつてハハハシたんだけどね。

「それで、どうでしたか、才悟様。麗菜お嬢様と一緒にあられて」

「うん？ そうだなー……」 いつでいつと、生意氣だな

「ただの生意氣ですか？」

「いや、ちよつとかわい生意氣

「やうですか」

柔軟な笑みを浮かべる修司さん。その微笑みが普段の三割増になつてこいるのは俺の気のせいではないだろう。

「ありがとね、修司さん

「はー?」

「なんか、胸のもやもやが晴れた。まだ兄と妹つて奴はよく分からなけれど、取っ掛かりは掴めた気がする」

「お役に立てたのなり、光栄です。これからも、お嬢様と仲良くしてあげてください」

「あ、善処するよ」

「はい」

「秋坂才悟ー！ 何せいつとしてるのよ、早く来なさい」

遠くで麗菜がぶんぶんと手を振つている。どうやら死角になつているせいで修司さんには気づいてないらしい。

「ほひ、呼んでますよ」

「修司さんに行かないの？」

「今行つたら間違いなく怒鳴られますので、戦略的撤退をします」

「いい判断だな。逃げるのは恥ずべきことじゃない」

「恐れ入ります」

修司さんは一礼すると音もなく消え去つた。真奈美さんといい修司さんといい、常識はずれもいじごだ。

「」「ハーフー、聞いえてるのーー？ 早くしなこと置いてくわよーー！」

「へへへ」

やれやれ、といつ仕草をして、ハンマー振り回されるのは御免なので朝霧家の暴君へと駆け出す。文句をぐしごしこいながら。

その時俺の顔に張り付いていたのは、たぶん”笑顔”って奴だつたと思つ。

後日談といふか、今回のオチ。

それはある日の朝のことだった。

「……真奈美さん。俺、勉強のし過ぎで目がバカになつたのかな。ぐるぐる巻きにされた修司さんがベランダに吊るされてるふうに見えるんだけど」

「……たぶん、錯覚じゃないと思ひます」

「ですよね」

傍に立つてゐる麗菜が「よくも私を置いて」とか「私の秘密も守れ

「すに」とかすんげえ勢いで怒鳴ってる。戦略的撤退は無意味だったか。南無。

しかし、あれほどの危機に立たされながら修司さんは苦笑いするだけだった。結構余裕っぽい。麗菜もそれを見てとつたか、懐からハンマーとは違うものが取り出した。

「もうひとついいかな、真奈美さん」

「なんですか？」

「麗菜が持つてゐるのつて、ハサミだよね！」

「ですねえ。縄ぐらいばつさり切れそうですねえ」

珍しく修司さんは本気であわてた声を上げた。「お嬢様さすがにそれは」とか「命はひとつしかないんですよ」とかかなり必死な説得を試みてる。

と、修司さんが離れたところに立っている俺達に気づいた。口をパクパクさせている。

タ・ス・ケ・テ

俺も口パクで返した。

コ・ノ・ミ・ノ・バ・ス・ト・ハ?

だつて興味あつたんだもん。

「じゃ、行こつか真奈美さん」

「えっ！？ 助けなくていいんですか！？」

「分かつてないなあ真奈美さん。昔からよく言つだら、トライは我が子を千尋の谷へ突き落とすって」

「なるほど、さすが才悟さんですねー。」

「だろー？」

俺達はすつたかと歩み去る」とした。

數秒後。

アツ

ツツツ！――！

この日、俺達は大切な何かを失つた……。

P . S .

次の日の朝食。

ひんぴんした修司さんが現れてコーヒー吹いちゃつたのは俺とキミだけの秘密だよ？

前回に比べると後半がやや失速気味の今回。ちょっと書くのほつたらかしにして書き書くとテンション含ませるの大変なんですよねー。さて、予告通り今回の主役はレイピょんですが……やべえ、死ぬ(笑)。

新キャラとかの構成もいろいろ練ってるんですが、それを含めてもこの子は作者の中では「キズナ!」中最高のかわいさを誇っています。別に作者に妹属性があるわけではないです。むしろぼくはあの(以下略)

さて、戯言はここまでにして紹介でもしましょうか。

朝霧麗菜

世界でも指折りの大企業・朝霧グループの御令嬢。朝霧家の娘であるという自負のため常に上に立つていないと気がすまない。典型的な負けず嫌い。一部を除き常に人を突き放すような物言いをするが、ぬいぐるみなどのかわいらしいものが大好きという一面がある。それなんてシンデレラ?

あまり他人との会話をしないためか、慌てたり怒つたりすると、台詞を奇跡的なまでに噛んだりすることがある。その折猫語へと派生する場合があり、一部では彼女こそ伝説のシンネコ様ではないかと囁かれているが、真相は定かではない。

特技はデストロイ。趣味はぬいぐるみ集め。座右の銘は「天下無敵」

第6話・新キャラは田乳? むうと俺のターンー(前書き)

タイトルの通り、新キャラが出来ます。

第6話・新キャラ誕生! すつと俺のターン!

ふりふりふり~

「はー、至福の時だわー」

あ、どうも、朝霧才悟です。今トイレに入つてます。『大』です。いきなり下品ですみません。ほんとすいません。謝りますから「ぶりぶり左衛門」とか「うんこマン」とかいう呼称はやめてくださいね。軽く引きこもれますから。

「ふー、すつきりした。では、仕上げに世界最高峰と謳われる日本便器の真骨頂を見せてもらおうか」

”おじい”ボタン、スイッチオン。

「ヒカラサイゴ、^{ケツ}目標を狙い打つぜ! はふんつ

「ひつ、おおお、ひつ、おーひつ~

「.....ほほイキかけました.....」

俺、日本に生まれてよかつた。ほんと。

「わい、おしつも洗つたし、あとは紙でふきふきと……よし、じゃあ部屋こもる」

ふるひるひるひる

「…………おおー? おしつのまつあが…………ー.」

やばい、またしたくなつた。仕方なくもう一度座る。

ふう。
えーと
お尻
と
あはんつ

これでよし。じゃあ今度こそ部屋に

ふるひるひる

- 1 -

座る する 噴射 呉立

.....

無限ループ？

「二十九歳の誕生日は、アーティストとしての第一回の個展が開催された。」

座るつ。するつ。噴射つ。拭くつ。立つつ。座る！ する！ 噴射！ 拭く！ 立つ！ 座る？ する？ 噴射？ 拭く？ 立つ？

座る！？ する！？ 噴射！？ 拭く
ふく フク

からん

ピート笛く吹く俺。

召喚される真奈美さん

「お呼びですか才悟さん
めやーつーーーなんでもの出しだ
るんですかーーつーー？」

「テメエ俺の息子を愚弄する気か！？ 錢湯で隠す必要もないぐら
い立派なのが密かな自慢だつたんだぞー！？」

「知りませんよそんなことーっ！！ なんでトイlenaんか呼び出す
んですかバカツ！ バカバカバカツ！ 才悟さんのバカツ！」

泣きながら逃走する真奈美さん。

「ハホホー！？見捨てないでくれ真奈美を＝ん＝！」

もちろん追っかける俺。

「逃がすかー！」

全力で真奈美さんを追いかけながら、何故か俺は今までにない爽やかさを感じていた。まるで俺自身が風になつたのではないかとう感覚。走れば走るほどすがすがしい気持ちになり、それと同時に、得も知れぬ高揚感が俺を包み込む。そしてこの股間の爽快感。何故だろうか。もうひとつ言つなら、周りからやけに叫び声がするのはどうしてなのだろうか。一体何故 ッ！

氣がついたらぐるぐる轟きで呪われてました。

「違つよ俺は変態じやないよ。俺はただ、お尻りを拭くための紙が欲しかつただけだよ。変態じやないよ。仮に変態だとしても、変態といつ名の紳士だよ。」 ひょり、待て麗菜！ とりあえずそのハンマーをしまえ！ 」の状態でそれを食ひ入ればマジで命が危うい！」

死いいいいにいいをああああらあああせええええええつ！

「ああ、ひめ子、あせ、あせ」

見事なスイングだったよ、麗菜。でもひとつだけ見落としていることがある。

のひとりだったってことを

その日、僕は死んだはずの両親と再会した。

季節は春。

桜が舞い、出会いと別れが無数に繰り広げられ、恋が溢れ、憎き
スギ花粉が空中散布され、浮かれた中「どもが妄想を爆発させ、」
“ぜんらのへんたいしんし” 裸で何が悪い！ が現れるような、
愉快で奇妙な季節。

そんな楽しい季節の最中 僕は世界一長い一十分を体験してい
た。

「……」

「……」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

「いつそ殺してくれ。」

そんなことを思わずにはいられないシチュエーションである。

原因是今俺が乗っている無駄に豪華な外車を運転している男。

名前はヤマさん。

「どうからどう見ても893な人だった。」

「才悟さん？ どうしたんですか？ いつになく静かですね。ま、まさかお体が優れないのでは……！」

「ダイジョウブ、ハイキダツ」

いかん、恐怖のあまり片言になつてゐる。

てゆーか、助手席に座つてゐる真奈美さんはなんで平氣なんだ。あれか、得意の天然パワーがこの893オーラを緩和しているのか。すごいぞ天然。年中脳内お花畠は格が違うなー。とっても失礼な物

言いである。

いやね、みなさん知つての通り、俺は一般の人と違つてやーさんは切つても切れない（切らせてくれない）関係にあつたんですね、強面のおっさんとかは比較的見慣れてるわけですよ。だがこのおっさんは違う。今まで俺が見てきた奴らとは比べ物にならない そ う、言うなればスーパー YAKUNA である。

しかもこのおっちゃん、俺達が車に乗つてから一晩も喋らないし、ちらちらとバックミラー越しに俺の方を見てくるから恐いの何の。冷や汗のかき過ぎで脱水症状を起こしかねない勢いである。なるほど、通りで麗菜がわざわざ別の車を用意させたわけだ。お兄ちゃんと一緒に車に乗るのが嫌だったんじゃないんだね！

……だよね？

なんて油断していると、

ギ
ロ
リ

1

ねつじ、ビックリの今の一睨みで軽く眞絶しちゃうたよ(だだ)が
なみに3回目)。

まったくもつて、どうして厳重朗さんはこんな人を雇つたんだろ

うか
。.

「あ、才悟さん見てくださいー！ 見えてきましたよー！」

いつそHARAKIRIでもしてやるつかと精神的にやばくなつて来たとき、救いの声が俺の生氣を呼び起した。

「や、やつと着いた……！」

3年は寿命が縮まった体に鞭打ち、窓の外に広がる景色を見る。

1

おつと、違う意味で意識が飛びかけたぜ。

「……あの、真奈美さん？ ホントにあれ？」

「あれこそ才悟さんか」の春から通へることになる。 神楽坂学園です。

神楽坂学園。

将来の日本を担う、経済界の御曹司やお嬢様が多数在籍している
超お金持ち学園。

俺の新しい学園生活が、ここで始まる
予定。

話は数日前にさかのぼる。

「……は？ 転校？」

ある日の夕食。いつも通り類が落ちそつたままで美味しい飯を食べて
いるとき、その話はやつてきた。

「そう、転校だ。才悟くんには今年から麗菜も通うことになつてい
る学園に転入してもらうことになる」

「ええつー？ 本当ですかお父様ー！？」

「……なんで俺より先にお前が驚くんだよ」

「冗談じゃないわつ！ 屋敷での生活を共にするだけでも苦痛な
に、その上學園生活にまでこの豚がずかずかと入り込んでくるなん
てつ！ お父様、私にストレスで死ねと仰るんですかー！？」

「……なんだろうね。最近は罵倒されるのに慣れたせいか、この程
度じや怒る氣もしたくなつてきたよ。これも成長かな、真奈美さん」

「や、さあ、どうなんでしょう?」

しかし、いきなり転校と来たか。相変わらず厳重朗さんは前置きなく俺に衝撃的イベントを持つてくるな。

「で、厳重朗さん。なんで転校なんて話が出たんすか? 俺が今まで通ってきた学校じゃダメなんすか?」

「必ずしもダメ、というわけではないが、私としてはやはりよりよい環境を君に提供したいのだよ。……もしや、転校はいやかい? 何か今の学校に強い思い入れでもあるのかい?」

「いや、やつこつのは特にないんすけど……」

別に転校自体に問題があるわけじゃない。

「ただ、俺の知らないところで勝手に話が進められていたつてのが、ちよつと気に入らないだけです」

「秋坂才悟! あんたまさか、お父様がわざわざ取り計らってくれた懇意を跳ね除ける気! ? そんなことしたら私がただじゃおかなければあでもそれを認めると言からじつと同じ学園に通うことに……! ……!」

麗菜はまづやく怒鳴つてゐるだけなので放置することとした。

「確かに、何の相談もなしに話を進めてしまつたことは申し訳ないと思っている。だが、これもすべて君のためを思つてのことなんだ。分かつてほし!」

「まあ、いいんすけどね。俺も神楽坂には興味あるし」

「」の辺の地域に住む者での学園を知らない者はいない。ていうか、国民の大半がその存在を知っている。

神楽坂学園つてのは一言で言えばお金持ち学校だ。ただし頭に『超』がつく。度々テレビにも登場するのだが、俺が初めてその学校のニュースを見たときの感想が「え？ これどこ？ 外国の観光地？」だった。そんなことを思わせるようなすゞい光景がテレビの奥で広がっていた。

まず敷地の広さからして格が違う。聞いた話では当時農地が多かった市を丸ごと買い取つて校舎や施設を建てたらしい。これだけでも眼球飛び出しだが、その敷地内に建てられているのは校舎や体育館などの一般的な学校設備だけでなく、バカみたいに多くの施設やグラウンド、果ては馬の牧場なんても設置されてる始末。ものはや校舎がおまけになりそうな勢いである。しかも大半の施設が国内外問わず有名な建築デザイナー達による合作で、空から見た全体像は壯觀の一言につきる国宝級ものである。ていうか去年国宝指定された。

ちなみに、神楽坂学園に入学するには面倒な手続きなどもあるが、そこまで大した学力がなくても試験は通るらしい。ただ、問題は学費だ。聞いた話によると、入学金だけでも『ピー』円は軽く必要らしい。正確な値段を口にすると俺の脳みそがショートしてしまって割愛するが、まあ、そんだけありや一生働かんでもいいだろとだけ言つておこう。要は金さえありや誰でも入れるのだ。

つまり、神楽坂学園とは我らが日本国の中と云つよ、

異世界と言つた方がしっくりくるような所なのだ。そんな庶民の憧れみたいなあの神楽坂に行けるいうのだから、俺としては拒む理由はない。

まあそんなわけで。

厳重朗さんの話を概ね了承した俺は簡単に転入試験を受け（ペーパーだけなので屋敷で受けた）、無事入学手続きも済ませたので、入学前に一回ぐらい下見に行こうと思いつ立ち現在に至るわけである。

「しかしあま、想像以上にすげえとこだな」

校門周辺の警備の厳重さにも驚いたが、何よりも驚いたのは学園内をバスが走っていたことだ。なんでも敷地が広すぎるため専用バスが園内を巡回しているとのこと。もうなんでもありの世界である。「へー、なかなかいい所じゃない。気に入つたわ。さすがは私が目をつけた学園なだけはあるわね」

一緒に下見に来た麗菜はさすがに最初は少し驚いていたようだが、今ではすっかり馴染んでいる。さすが腐つても朝霧家のの人間、こういう常識外れの場所での適応能力が高い。

ぶんつ

「つおつ！？ テメーいきなりハンマー振り回すなよ！？」

「あんた今、私に対して失礼なこと考えたでしょ？」

「バカ言え、貧乳でチビで口リで世間知らずのクソ生意気な麗菜もさすがは腐つても朝霧家の人間なんだと褒めちぎつていただハンマークラッショッ！？」

「死ね！ 今すぐ死ね！ 恐るべき勢いで死にさらせつ！」

「死ぬ！ 当たつたら今すぐ死ぬ！ 恐るべき勢いで死にかかります！」

なんて、ギヤー、ギヤー騒ぎ立てる俺達。うーむ、この前の一件で少しは仲良くなれたと思つたんだがなあ。それにしても、やけに勘のいい奴である。

「うーーー！ ふたりともやめてくださいーーー セリカくみなせんでお出かけしたんですから、もうひと度良くなしてくださいよーーー！」

「はは、いいじゃないですか雨宮さん。会話がなによつはよつぽど楽しいですよ。特に私が」

「もー！ 伊達さんも伊達さんです！ じゃあそんなに楽観でも
るんですか！？」

「雨宮さん。人生を楽しく生きるコツは、投げやりになることです

「投げやりにならないでください……」

俺達のお供であるメイド・執事コンビは揃つていつも通りの反応。相変わらず真奈美さんは気苦労が多そうだ。まったく誰だよ俺のま

なみんを困らせてる奴は。

「ふんっ！ 言つとくけどね！ 私はあんたがここに入るにこんなて納得してないんだから！ 秋坂才悟」ときがこの学園で過ぐすなんて1兆年は早いのよ！」

「んな」と言われてもなあ。俺もついこの生徒手帳もらつたしどりにもできないと思うけどな。つーか、あれほど厳朗をここに言われてまだ納得してなかつたのかお前」「

「ふきーっ！ 大体お父様は優しすぎるのよー。こんなびこの馬の骨ともしらない男を養子にするだけならまだしも、負債を帳消しにした上に学業の面倒まで見るなんて！ あんた、ちよつとは遠慮しようとか思わなかつたの！？」

「あ、見て真奈美さん。通り一面に桜が咲いてるよ」

「わあ、綺麗。もうすっかり春ですねえ」

「ホント綺麗だ。もちろん、真奈美さんの方が綺麗だけどね」

「も、もつ、才悟さんつたら……！」

「聞けつ……」

「いつも相変わらず無駄に元気だなあ。いつもこんなテンショングで疲れないのかねえ。

「しつかし、おもしろいぐらい人がいねえな。ここまで回つて出会いつたのがガードマンだけつてどうよ？」

「仕様がありませんよ才悟様。もともとこの敷地は広い上に、今はちょうど長期休暇ですから、生徒の大半はご両親と共に海外へバカンスに行ってるでしょう」

さて、今さらつと聞きなれない春休みの過ごし方が聞こえたぞ。

「実際に生徒の方をご覧になりたいなら、校舎の中に入つてはどうですか？ 校舎内ならば、何人かは登校している生徒もいると思いま
すが」

「そうだな。それじゃ他の施設は後回しにして……ってあれ？」

「お嬢様ならあちらに」

修司さんが指差した方を見てみる。

麗菜はたくさんのペンギン達と戯れていた。

「待てやおい！ なんだよこの辺の『ハビ』じゃない光景は！？」

「わあ、かわいい。麗菜様、わたくしも混ざつていいですかー？」

「ギャグか!? その反応はギャグなのか!? 」
「いつかギャグだ」と書いてよまなみん!」

「おや、才悟様はボケてくれる方が欲しいのですか？」
では僭越な

がら私が……」

「違え！ てかあなたの場合は絶対わざとだろ」「うー。」

ふう……久しぶりに熱くシッコんじまつたぜ。しかしさすがは神樂坂、学内にペンギンまで徘徊しているとは。いつそテーマパークとして一般公開した方がいいのではないだろうか。

それはさておき……

「ペンペン ペンペン お姉ちゃんとあつそびつましょっ 」

天使 麗菜降臨。

じうやらぬいぐるみでなくともかわいいものを前にするとモードチェンジするらしい。ずっとそのままでいると切に訴えたい。

「こしても、麗菜も案外お子様だな。ペンギン程度で腰碎きになるとは」

「いいじゃないですか。とてもかわいらしいです、麗菜様」

「はつ、いくらかわいくとも貧乳なら意味がないのさ。そもそも団体行動において勝手な行動をするなんてまず人として間違つて……」

と、その時何気なく俺は視線を宙に向けた。

セーラー服飛ぶ

\$\$\$

「ああ！ 太悟さんが風に飛ばされている一万円札を追いかけて行きましたよー？」

「ははは、またしてもパーティーが一人減つてしましましたねえ」

「オ橋をーんつ！ ーの、のんきな」と言いつてる場合じゃないですかー！ オ橋をーい、

「読者の期待を裏切らない男、俺！」

はい、というわけでまたまた迷子になつた才悟つちです。なんだ
らうね、見知らぬここにきたら必ず迷子になるつてのが俺のクオリ
ティなんでしょうがね。

「しかし、じつはまずいぞ。あんまりのんきな」と言つてゐる場合じやねえ……」

予備知識から既に分かつていていたことだが、この神楽坂学園は想像以上に広い。市全体を買い取つたなんてただの誇張表現だと思つてたがそうでもないらしい。こりや元いた場所に戻るだけでも相当骨が折れそうだ。

幸い学内は専用バスが走つてるのでそれにさえ乗れれば大通りまで戻れると思うが、まずそのバス停が見つからない。道路も見当たらない。ていうか建物すら見えない。

あ、言い忘れてたけど。

俺、今森の中だから。

「……もつツツコむ氣力も起きねえよ」

見渡す限り木・木・木。日はあまり届かないし道らしいものもない。このままじや遭難確定の状況である。その上残念なことに、俺がこんなところに迷い込む原因になつた諭吉さんはどこかの木の枝に引っかかつたらしく見失つてしまつた。くそ、一万円あれば工口本たくさん買えたのに！ 巨乳のお姉ちゃんのパフパフが見たかつたのに！

え？ べつにそんな必死にならなくたつてお前金持ちじゃないかつて？

バカヤロウ！ 苦労して手に入れたエロ本だからこそ意味があるんじゃねえかっ！ 親にもらつた小遣いで買う？ ネットで注文？ 邪道邪道っ！ 貴様らは分かつてない！ 分かつていない！ 本当の漢ならば、自分で稼いだ金でエロ本を購入するのだ！ なに？ 店員に本を見られるのが恥ずかしい？ 女性店員ならなおさら？ このボケナスどもが！ そんなもん堂々と趣味丸出しのエロ本差し出してついでにホテルにでも誘えればいいだけの話だろ？ が！ 自分の欲望も肯定できずに何がエロスか！ なに？ それはさすがに相手も引くだと？ これだけ言つても分からんのか貴様らはあ！ 齒を食いしばれ、今日は徹底的にじごくっ！ 貴様らがエロの何たるかを理解するまでは寝られないと思えーっ！ はいいいい指導指導指導あおおおおつー！

「せえ……せえ……ん？ そもそも空飛ぶ諭吉は自分で稼いだ金ではないだと？」

。

「さて、まずはこの森を抜けることを優先するか。時間が惜しい。急いひつ」

マイ脳内論争は無事平和的に帰着したので、俺はすつたかと森を歩き出した。うん、まああれだ。漢なら新のエロ道を極めろって話ですよ。そういうことにしてもう一つ、それがいい。

そんなこんなで歩き始めて、およそ30分。

「うーん

まあ、最初から予想したことだけだ。

「……なんか変だな、この森」

変というか、まず存在からしておかしい。

確かにこの神楽坂学園の敷地は恐ろしいほど広い。30分歩きつめても出られないぐらいの森が存在することはできるだろう。だが、あくまでここは『学園』だ。いくらなんでもこれはないだろつてものがわんさかある神楽坂だが、生徒が遭難する可能性のあるこんな森を敷地内になんの整備もなく置いておくとは考えにくい。しかもこここの生徒は大半がひ弱な御曹司かお嬢様である。なおさらおかしい。一体何なんだよ、この森。

「くそ、せめて携帯が使えれば真奈美さん達に連絡を入れることができるんだがな……」

試しに携帯を開いてみると、やはり圈外だ。自力で森から脱出するしかないらしい。

「と言つても、正直これはお手上げ侍なんだけだな……」

体力はまだ残つてゐるし、精神的にも落ち着いている。だが、日がほとんど遮られた道とも言えない道を一人で歩き続けるつてもかなりしんどい。長居をするのは得策じやない……。

と、若干鬱が入り始めた頃になつて、ようやく田の前が開けてきた。

「……なんだ、これ？」

せつと森を抜けたと迷つたら、田の前に古びた建物がぽつんと立つていた。

よく見れば、それはどうやら古くなつて打ち捨てられた廃校舎らしかつた。サイズはいたつて普通。おかしい。いや、おかしくないけどおかしい。この神楽坂にこんな普通サイズの校舎があるはずがない。たぶん、市を買い取つた際にもともと建てられていたものだと想つけど、なんでわざわざ残してあるんだ？

「ま、そんな」とせづりでもいい。それよりも……「れはフラグじやないか？」

「ひいにいかにも怪しげな場所には何かしらのイベントが用意されているのが世界の常識である。例えばお化けが出たり地下への階段を発見したり田乳ちゃんと出くわしたりボインがぱふぱふでバルブンテだつたりぐへへへへ。

いやしかし、せつと森を抜けたのだから、まずは携帯で連絡を取るべや……でもあの真奈美さんのことだからすぐ駆けつけやつて探索してゐる暇とかなさうだし……どうすの俺？

2 行く！

3 行くっ！！

欲望に素直な俺に万歳。

「うへへへ、イベントイベント～～～

今、イベントを求めて全力疾走している俺は、お金持ち学校に通う予定のじく一般的な男の子。強いて違うところをあげるとすれば、ボインに興味があるってどこかナ。名前は朝霧才悟。

そんなわけで迷子の果てに見つけた怪しげな建物に来たのだ。

「！」

ふと見ると、廃れた教室の片隅に、チャイナ服を来た一人の美女

が立っていた。

ウホッ！ いい巨乳……。

ハッ。

そう思つてゐると、突然その美女は俺の前で魅惑の谷間を寄せてあげはじめたのだ……！

「肉まんおーついかが？」

「テイクアアアアアアアアアアアアアアアアアウトチー！」

俺は口のコビデーが抑えられず無我夢中で一いつの歟りもくと飛びついた……！

「肉まん最高
ツツツ……！」

といつ夢を見たのぞ。

「全俺が泣いた！ どうせこんなオチだと思ってたよひくじょうつ
！」

跳ね起きるとともにツツ「む俺。……跳ね起きる？

「…………」

状況を確認しようとしていきなり鋭い痛みが頭を襲つた。同時に意識が鮮明になつていぐ。そうだ、確か俺は好奇心に突き動かされて、興奮のあまりスキップで校舎を探索していたら、古くなつた床を踏み抜いて……。

見上げると、結構高いところに穴が開いていた。さすが俺、あんなところから落ちたというのに特に深刻な怪我が一つもない。ダテに借錢取りと死闘をくりひろげたわけじゃないぜ！（リンチくらつてただけってのは俺と君だけの秘密だ）

痛みを堪えながら立ち上がる。さつきまで探索していたのは二階だったからここは一階……のはずだが、さつき一階を回つたときにはこんな部屋なかつたと思うんだけど……。

そこで、俺は初めてこの部屋に俺以外の人物がいることに気づいた。

「…………」

ぜんぜん気づかなかつた。これでも人の気配を察知するのは得意

なのに。修司さんの時も気づけなかつたが、これはそんなレベルじゃない。
”本当に、この部屋に最初からいたのだろうか？”

なんてのは正直どーでもいいことなんだが。

そんなことよつ！

薄暗い廃校舎の部屋の片隅、外から入るわずかな光に照らされた人物。その姿は間違いない……

美少女キタ

ツツー！

神よ……あなたは俺を見捨てなかつたのですね。

いやー、何事もチャレンジしてみるもんだよな。まさかほんとにモノホンの美少女と出くわせるとは。まあね？ 予感はあつたわけですよ。なんかこう、朝起きた瞬間から、「あ、今日巨乳ちゃんと知り合いになれる」という絶対的な予感が！ といつか確信が！

さつきの夢は正夢だつたんだ！

そうだ俺の確信が外れるわけがない！

だつてタイトルが『あれ』だもの！

「やつせつ凶あん魔魔」

ツツツ――――」

美少女の胸には、果てしない平原が広がっていた。

「……………あるペー」

しばし、皿を畳じる。

開ける。

つるーん。

効果音が聞こえやつせつ凶魔魔、やつせつ凶魔魔の夢は詰まつてな

かつた。

「…………あの、君、新キャラ?」

「…………?」

少女は首をかしげる。しばし逡巡した後、なんとなく意味を悟ったのか、少女はコクンと頷いた。

「ハイ——ツ——！」

バキッ

「…………あれ? なんでだろ?」
思い切り顔を殴ったのに夢から覚めないよママン

その時、ふと天からお告げが聞こえたような気がした。

『カレンダー、見てみな

言われた通りに携帯のカレンダーに目を通した。

4月1日。

世間はそれを、ハイブリルフルと呼ぶ。

「釣りか！？ 読者をも巻き込んだ盛大な嘘つぱちか『リバー』？ 釣られてサー セン！」

「この世に神は存在しない。」

そんなことを深く痛感させられた俺だった。

「…………（ジー）」

「あ」

いかん、絶望のあまり新キャラちゃんをほつたらかしにしてしまつた。ていうか、まだいたのか君。普通あれだけの奇行を見れば逃げ出すと思つんだけビ。直観ぐらう俺にだつてあるよバカヤロウ！

しかし、この新キャラちゃん、ずっとこっちを見てくる。仲間にしてほしいのだろうか？ わざわざからずつと喋らないし、内気な子なのかも。

いやしかし、冷静に考えると、これなんてギャルゲー状態だよな。それならここここで選択肢とかが出てきそうだ。あ、ちよつと俺の頭にぽわぽわと選択肢が出てきた。

どれどれ。

1 犯す

2 ヤる

3・ナードをする

とんだ下種野郎だぜヒヤッホウ!

「…………」

あれ。なんか距離を開けられちゃったぞ。変だな、おかしな拳動
はしてないつもりだが。

「…………そりこり下品なこと考える人、嫌い」

「…………。もしかして心読まれますか俺？」

「いやかやつと喋ったなしのナ。

「ねえ、もしかして俺の考えることが分かるの？」

俺は努めて優しい聲音を選びながら少女に尋ねる。目が合つ。速
攻でそらされた。素つ氣ない。しょぼーん。

ふむ、答えないとこりのなら、ひとつ試してみるか。

～～～下ネタを回想中～～～

ズザザザザザザザザザザザツ ものすじに速さで後ずさる音

「…………（じとー）」

やめて……そんな田でぼくを見ないで……。

「ぐすつ。心が読めるとか卑怯だ、プライバシーの侵害だー。訴えてやるがうえええん」

シラックのあまり幼児退行に突入した俺。まあブラフだけだ。

「……ぜんぶがぜんぶ見えるわけじゃない。普段は相手がどんな心理状態にあるかを知るのがせいぜい。でも、何故か邪な思いだけははつきり見えてします」

な、なんといつ思春期殺しの能力！ だがしかあしつ。本場イギリスに勝るとも劣らない絶対紳士であるこの俺がそう簡単に邪な思いにとらわれるとでも！

～～～うはははハーレム狂想曲～～

「…………やめなう」

「すんませんー、マジ冗談ですか！ そんな汚物を見るよいつな田でまくを見ないでつー」

サイゴはえつちなもひつけふついとされた！

「ぐすつ。ひどい、ひどいよ神様。なんてキャラを投入しちまつたんだよえぐつ。俺からエロスを取つたら、紳士から変態を取つたら、一体何が残るつて言つんだよびえええええん！」マジ泣き

「……変な人」

新キャラちゃんは無情な一言で俺に止めを刺した。

もう……どうでもしてくれ……。

俺は投げやり気味に壁際に座り込んだ。深い息をする。すると、思つた以上に体が疲れていたことに気づいた。はて、なんでこんなに疲れてるんだっけ？ 素でそんなことを数秒間考えて、やつと俺が迷子であることを思い出した。廃校舎への興味が強すぎてしまつかり忘れていた。

一瞬、真奈美さんに連絡を取ろうと思つたが、結局やめた。別に深い意味はない。もうこの建物の田舎らしい場所はあらかた回つてしまつたし、イベントらしきものにも遭遇できたので満足といえば満足なのだが、なんとなく俺はもう少しこの不思議な少女と語りついていたかったのだ。

「なあ、君つてさあ、名前なんてーの？」

「……？」

「名前だよ名前。人なんだから名前ぐらいあるでしょ」

「…………」

「あの、無視ですか？ シカトですか？」

「…………」

「……お一けい。それは俺に対する挑戦と受け取つていいんだな？」

「？」

俺はちゅうぶ近くに転がっていた白のチョークを手に取り、壁に文字を書き始めた。

「第一回一 新キャラちゃんに素敵な名前をつけよう選手権！ はい拍手ー！」

「……それ、『第』一回じゃなくて、『策』一回になつてる

「…………ハツハツハ。モチロンジヨウダンドエスヨ？」

さて、では気を取り直して。

「万年寝太郎」

「…………え？」

「え？ じゃねえよ。万年寝太郎だよ。苗字が万年で寝太郎が名前。どうよこれ？」

「…………わたし、そんなにいつも寝てないし、男の子でもない

「なんだ気に入らなかつたか。じゃあそつだな……麻生太郎なんてどうよつ?」

「……わたし、政治なんてよく分からないし、アニメも漫画も知らないし、何より男の子じやない」

「これもダメか。それじゃあ……あつ、浦島太郎とかぴつたりじゃね?」

「……いい加減太郎から離れて」

「たく、注文の多いやつちやなあ。分かつた分かつた、そこまで言うなら、君には俺が子供を授かつたときに『えようと思つていた名前、小便太郎を贈呈しようじやないか。もつてけドロボー!』

「…………」

「え、嘘? これもダメなの? おかしいな、俺の予想では小便の時点で喜びのあまり側方倒立回転でも始めるはずだつたんだが……。うーむ、ここまで手こわいとなると、やはり禁断の花子シリーズを持ち出すしか……」

「…………」

「ん?」

「……わたしの名前、ゆづ」

「ほー。ゆづ、か。いい名前だな。まあ小便太郎には遙かに劣るが。」

俺は朝霧才悟。漢字分かるか？ 朝の霧に、才を悟るつて書くんだ

「……バカにしてる？ それぐらい分かる」

「そりゃ？ お前、パツと見、中学あがりたてに見えるけど」

「……失敬な。わたし、あなたより年上」

「うそつ！？ 今何歳！？」

「268歳」

「はいはいあるあ ねーよー リアル世界にロリババアが存在できる道理はチリ一つとして存在しません！」

「……そんな」と言われても。「これ、変えよつのない事実。不变の真理」

「……分かった。そこまで言つなら268歳つてことにしてやるわ。じゃあこれから君の呼び名はババアな」

「え」

「これからよろしくね、ババア」

「……」

「うん？ どうしたんだいババア？」

「……」

「あれ？ 聞こえなかつた？ ああそつか、ババアだもんね。声も
聞き取りづらいよね。ごめんよババア。で、どうしたんだい？ バ
バア？」

「………… 14歳で、いい

「え？ よく聞こえないよババア」

「14歳！」

「うわー！」

初めて聞いた少女の怒声に俺は飛び上がつた。見ると、今まで感情に乏しかつた表情に赤みが差している。どうやら思つた以上にババアといつ呼び名が不名誉だつたらしい。

「あーびつくらこいたあ。なんだ、ちやんとでかい声も出せるんじ
やないか。やつぱり子供は元気な声を出してる方がいいね、うんづ
ん」

「…………」

沈黙してしまつた。さすがにからかいすぎたかな。

「うなつたら、密かに編み上げていた俺の処世術、”土下座から
始まる信頼関係”を実行に移すしかないか

「…………どうして？」

突然、少女は口を開いた。まん丸とした目をまっすぐ俺へと向けて。

「……どうして、あなたはここを去らないの？」

「どうしてって、ゆうに興味があつたから。もつと話してみたかったから。……ひょっとして、迷惑だつたか？」

ふるふる、と彼女は首を振つた。

「……恐くないの？」

「恐いって、何が？」

「……わたし、人の心が読めるんだよ？」

「うん、それが？」

「……気持ち悪く、ないの？」

「べつに？」

「……わたしがうそついてるって、思わないの？」

「そりや、突拍子もなく『わたし』、実は人の心が読めちゃうんですけど、すう、てへつ』とか言い出したら張り倒してるところだけど、実際にゆうは俺の心を読んだんだろ？ 俺は人から得た情報には常に疑心を抱いてるけど、自分の目で見た情報は信じることにしてるんだ」

「……変な人」

「失敬な。ここまで完璧なナイスガイなんて今時珍しいべ？」

「……訂正。サイゴはおもしろい人。くすっ」

ゆうは初めて俺に笑顔を向けた。それは笑顔というにはあまりに淡いものだったけど、俺の心はほんわかと温かくなつた。

「……あ」

「どうした？」

「もひ、帰らないと……」

「やうなのか」

携帯の時計を見ると、時刻はちょうど17時を指していた。意外に長い時間ここに居たらしい。

「……ねえ、サイゴ」

「ん？」

「……また、一緒に遊んでいい？」

「まあ、今みたいな感じでいいなら、いくらでも相手してやるけどさ、俺なんかと遊ぶより友達と遊んだ方がいいんじゃないのか？」

「……いい。サイゴがいい」

それには、元気な顔で付け足した。

「……わたし達、もう友達」

「なるほど、こりゃ一本取られた。まはは」

「ふふ」

「ううしげ、一つの微笑をもらした俺の新しい友達は、どうかへと去つていった。」

「……ふう。これまた、変わった奴と知り合になつちまつたなあでも、悪い子ではなさうだ。不思議やんではあるナビ、おとなしいし、かわいいし。ぜひウチの麗菜とポジションチョンジしてもらいたい。」

「さて、それじゃあ俺もみんなのところへ戻るかな

もう一度俺は携帯を取り出してアドレス帳を引き出した。そんで真奈美さんの番号を見つけ出してホール。何回かホール音が鳴つてから、それが止まる。

「もしもし、真奈美さん？ 俺だよ俺俺。あ、オレオレ詐欺じゃないぞ？ こしてもよく一発で電話に出れたなあ真奈美さん。いつも2、3回ははミスらないとダメなのに。あれ？ 真奈美さん？ もしもし、聞こえたる？」

おかしい。ぜんぜん返事を返してくれない。訝しく思つて俺は画

面を見てみた。

バッテリー切れです。充電してください

「…………

あるえー

さて、質問するNの野郎。

「この尋常でないほどの広さを持つ学園を、救助なしに徒歩で脱出できる可能性はいくらくらい？」

「……ハツハツハ、おーけいおーけいなんにも問題ないあるNー。とにかく誰かに会えればいいんだからちょーうくしょーあるNー」

イツツポジティブシンキング。大丈夫！ だつて僕はやればできる子だものー

もちろん、俺が救助されたのはそれから7時間後のことでした。

もしも許されるならば、わたしは神を殴りたい。

はいはい釣りIN。

いやー、一回やつてみたかったんですね、タイトル騙し。ホントはエイプリルフールネタとして4月1日に出す予定だつたんですけど、見事に間に合いませんでした。もし作者がプロになつたとしたら、速攻で首を切られるでしょうね。締め切り？　なにそれおいしいの？

さて、今回はまたずいぶんと間が空いてしまいましたが、今回のは理由があるんです。一応作者は職業的には『高校生』という立場にいるわけで、今年はその高校生活でもつとも厳しいイベントつまり受験があるわけです。そんなわけで最近は予備校と家を行き来してばっかりで小説を書いてる時間がないんです。気力もわからないですし。

ということは、まことに勝手ながらしばらく小説の更新はストップということになりそうです。暇があったら書いたりするかもしれません、せいぜい1・2話分ぐらいだと思います。本当に申し訳ありません。

それでは、また受験が終わったシーズンにでもお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8837e/>

キズナ！

2010年10月10日00時19分発行